

VIEW21

ビュー21

2013

Vol.2

小学版

特集

自ら表現したくなる授業づくり

総論 東京都稲城市立稲城第七小学校校長 **味村和行**

ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室顧問 **八木義弘**

学校事例 茨城県小美玉市立羽鳥小学校／東京都福生市立福生第五小学校
福島県会津若松市立松長小学校

展望 白梅学園大大学院子ども学研究科長 **無藤 隆**

私を育てた
あの時代、あの出会い

長野県岡谷市立神明小学校校長 **宮坂昌一**

Benesse発
これからの教育

栃木県鹿沼市立みなみ小学校 個の課題と特性に応じた指導をICTで実現

つながる
学校と家庭の学び

北海道美瑛町立美瑛東小学校 6年間の記録「マイカード」で子どもの夢や希望を育む



特集

3 自ら表現したくなる授業づくり

- 4 **総論** 「分かった！」感動が人に伝えたい原動力。
表現することで考える力も育つ
東京都稲城市立稲城第七小学校 味村和行校長／ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室 八木義弘顧問
- 10 **学校事例1** 算数での学び合い活動を通して考えを論理的に表現する力を育む
茨城県小美玉市立羽鳥小学校
- 14 **学校事例2** 主体性を育む授業づくりが自らを表現する素地になる
東京都福生市立福生第五小学校
- 18 **学校事例3** 「自分たちに何が出来るのか？」を考え、表現し、行動する力を育む
福島県会津若松市立松長小学校
- 22 **展望** 考える力は表現によって深まり、表現し合うことで思考が共有される
白梅学園大学院子ども学研究科長 無藤 隆

連載

- 1 私を育てたあの時代、あの出会い
人と出会い、本物に学ぶことが教材づくりの軸をつくってくれた
長野県岡谷市立神明小学校校長◎宮坂昌一
- 26 **Benesse発** これからの教育
個の課題と特性に応じた指導をICTで実現
栃木県鹿沼市立みなみ小学校
- 28 つながる学校と家庭の学び
6年間の記録「マイカード」で子どもの夢や希望を育む
北海道美瑛町立美瑛東小学校
- 32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所 発足のごあいさつ

このたび、加速し複雑化する“子育て・教育環境の変化”に迅速かつ総合的に対応し、一層の社会貢献を果たす目的の下、株式会社ベネッセコーポレーションの研究機関である「ベネッセ教育研究開発センター」「ベネッセ次世代育成研究所」「ベネッセ高等教育研究所」「ベネッセ食育研究所」の研究機能を、「ベネッセ教育総合研究所」に統合する運びとなりました。

今後も、「子どもたちの未来」と子育て、教育のあるべき姿を模索し、社会に貢献できる民間の教育研究機関を目指して活動してまいります。引き続きご指導いただきますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

2013年8月吉日

ベネッセ教育総合研究所長 谷山和成

ベネッセ教育総合研究所
<http://berd.benesse.jp>

次世代育成研究室	妊娠・出産、子育て、保育・幼児教育領域
初等中等教育研究室	小学校・中学校・高等学校領域
高等教育研究室	大学領域
グローバル教育研究室	デジタル、英語領域
情報編集室	情報誌、WEBサイト運営

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第13回

人と出会い、本物に学ぶことが 教材づくりの軸をつくってくれた

長野県 岡谷市立神明小学校校長 宮坂昌一 MIYASAKA SHOICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、宮坂校長が語る。

人々の営みにふれ、
自分のあり方を問う授業を

私は中学時代の恩師、伊藤岩廣先生の導きで、社会科の授業で地元の工場をいくつも見学しました。カメラ、バルブ、寒天などの工場で働く人の話を聞いて、仕事には目に見えないところでこんなに苦労があるのだと深く考えさせられたことを、今でも覚えています。こうした経験もあり、教師となった私は、子どもが人と出会い、本物にふれ、自ら体験することにこそ学びがあると考え、教材研究をし、指導をしてきました。

自分の教師としてのその軸を追究できたのが、信州大教育学部附属長野小学校での3年間でした。社会科の研究会で主任の黒岩修治先生がよく言われたのは、「人々の営みにふれ、子どもが自分のあり方を問うような授業にしよう」です。それは、私の中学時代の工場見学での経験と重なりました。本物だからこそ感動し、真剣に取り組む人が話すからこそ心を動かされ、そして、自分はどうなのか、どうありたいのかを考えるようになる。それが、私の目指す授業となりました。

しかし、本物にふれる活動を取り



みやさか・しょういち 専門教科は社会科。軽井沢町立軽井沢東部小学校、諏訪市立高島小学校、長野県教育委員会松本（現・中信）教育事務所指導主事、諏訪市立城南小学校教頭などを経て、現職。

1978 (昭和53)

新採として
小海町立北牧小学校
(現小海小学校)
に赴任

1985 (昭和60)

富士見町立
富士見高原中学校
(現富士見中学校)
に赴任

1988 (昭和63)

信州大教育学部
附属長野小学校に赴任。
先輩の先生方に
鍛えられる



クラスで農家を訪れ
きゅうりの栽培の
様子を見学。
子どもたちは
きゅうりの収穫も
体験した

1991 (平成3)

諏訪市立四賀小学校
に赴任。道徳教育の
研究を進める

1994 (平成6)

長野県教育委員会
長野（現・北信）
教育事務所指導主事
に着任

2003 (平成15)

下諏訪町立
下諏訪南小学校に
教頭として赴任

2008 (平成20)

飯田市立竜丘小学校
に校長として赴任

2010 (平成22)

岡谷市立神明小学校
に赴任

「本物だからこそ感動し 自分のあり方を考えられる」



入れながら、社会科の目標を達成するような授業を行うのは、私にとって高いハードルでした。他の先生の授業を見る機会がよくあったのですが、他学級の子どもは自分で考え、話し合いを進め、自ら学んでいます。同じ学年のはずなのに自分の学級とのあまりの違いに驚き、子どもたちをそのように導けない自分が情けなくてしかたありませんでした。子どもの内面をも十分に見取った上で、活動でなければ、学びには結び

付かないのだと痛感しました。また、ある研究会で、完成間近の紀要を「この授業で何をやりたいのか分からない」と言われ、一から作り直しをさせられました。「子どもは楽しく活動できるかもしれないが、活動が単に流れているだけで、それぞれの場面で子どもにどういう力を付けたいのかが弱い」と指摘でした。自分としてはその要素を入れていくつもりでしたが、まだまだ浅いことを痛感しました。

研究授業で大失敗もしました。子どもからたくさん発言が出てきたのはよかったのですが、思いもよらぬ方に話が進み、子どもの発言をつなぐことも質問に答えることも出来なかったのです。明らかに準備不足でした。そんな私を見透かしてか、授業終了後、ある子どもが「今日はしまりのない授業だったね」とつぶやいたのです。私は冷や汗をかきましたが、事後研究会で「普段は満足できる授業をしているから、子どもはああ言ったのだろう」と先生方に言われ、救われた思いがしました。

教材は自分の足で探し、 人との出会いでつくる

この時のものがき苦しんだ経験から学んだものも大きく、その後、一から出直す気持ちで教材研究に没頭しました。インターネットなどない時代でしたから、頼りにしたのは自分の足。休日に車を走らせ、気になるものを見付けては車を止めて調べたり、人に話を聞いたりしました。

ある時は畑で作業中の人に声を掛け、その農業に対する真摯な姿勢に感銘を受けて、後日連絡し、子どもと農作業を見学させてもらったこと

もあります。人が違えば、話す内容も違います。子どもにどんな話を聞かせたいか、そこから何を感じ取ってほしいか。本物であると同時に、どんな人が子どもにも語り掛けるかも重要だからです。

教材づくりの姿勢は、校長になつた今も変わりません。中庭にある遊具や渡り廊下のすのこは、昨年、6年生が地域の木工さんに指導を受けながら、学校の裏山にあった間伐材を活用して作ったものです。高学年として人の役に立つ活動をしたという子どもの思いを聞き、私がかねてから目をつけていた間伐材を使って何か作るのはどうか、場所は空いている中庭を活用できないか、地域で木を大切にする木工さんを探せないかと、先生方の教材づくりを支援しました。

子どもを指導するのは教師です。しかし、授業は子どもの思いから発するもので、子どもと教師が共につくものものです。休み時間などに先生や子どもと話し、何をしたいのか、どんな思いがあるのかを聞いています。授業は持たなくても、一緒に授業をつくる気持ちで教材づくりをすることが、私の楽しみでもあるのです。

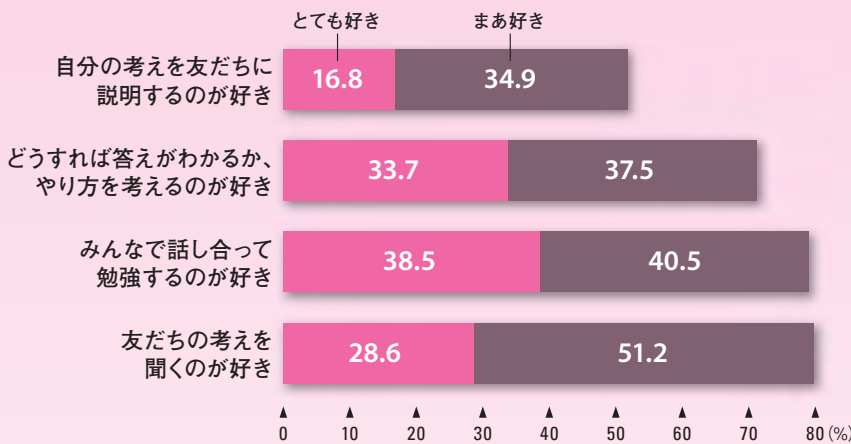
特集

自ら 表現したくなる 授業づくり

新課程3年目となり、各教科の授業では、思考力、判断力、表現力の育成のため
言語活動の充実が図られているという。

しかし、ベネッセ教育総合研究所の調査(算数)では、「自分の考えを友だちに説明する」ことに
苦手意識を持つ子どもたちの実態も浮かび上がる。今号では「表現力」に着目し、
自らの思いを表現したくなる授業づくりについて考えたい。

話し合いや考えることに比べ、 自分の考えを友だちに説明することに苦手意識(算数)



* 「あまり好きではない」「まったく好きではない」、無答不明は省略している

算数の勉強で「友だちの考えを聞く」ことや、「みんなで話し合っ勉強する」ことが「好き(とても+まあ)」と回答した子どもは約8割であるのに対し、「自分の考えを友だちに説明する」ことが「好き(とても+まあ)」と回答した子どもは約半数にとどまっている

出典/ベネッセ教育総合研究所「小学生の計算力に関する実態調査 2013」2013年3月実施
(全国の公立小学校1~6年生 7,827人対象。この設問は3~6年生 5,308人対象)

◎子どもたちは、どうすれば答えが分かるかを考える楽しさと共に、友だちの考えを聞いたり、話し合ったりするなど、みんなで学び合う楽しさを感じているようだ。いずれの項目も学年が上がるにつれて「好き(とても+まあ)」の比率が下がるという課題はあるが、今後は特に、自分の考えを説明し、それがみんなの学びにつながることを楽しいと感じられる指導が求められる。

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室 研究員
橋本尚美

「分かった！」感動が 人に伝えたくなる原動力。 表現することでも考える力も育つ

表現力の育成に注力する学校が増えているが、「表現させることが目的になっている」というような課題も顕在化している。表現力を高めるためには、どのような指導がポイントになるのだろうか。思考力や表現力を高めるための研究を進める稲城市立稲城第七小学校の味村和行校長と、研究を支援するベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室の八木義弘顧問に話を聞いた。

●子どもたちの表現力について

人前で話すのは得意でも 表現力の育ちには課題

——新課程になり、表現する力が高まっているという調査結果（図1）がある一方で、課題もあるようです（図2）。先生方が子どもたちとかわる中で、表現力は十分に育っていると感じられているでしょうか。

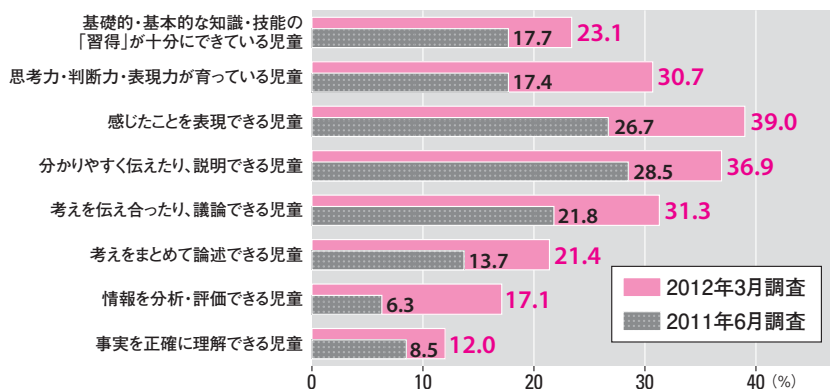
味村 自分の考えや思いを伝える力が表現力だとすれば、課題は多いと感じます。家族が多かった時代は、小さな子どもでも、自分で主張しなければ困った事態になっていたよう

に思います。しかし、今の子どもは、小さい時から保護者に細かく指図をされ、何も話さなくても意をくんで応えてくれることに慣れていきます。表現力は鍛えないと育たないばかりか、衰えてしまうものです。子どもが自分の思いを伝える場面が減っていることが、表現力に課題のある背景の1つだと考えます。

八木 保護者が先回りして、手や口を出してしまうことは多いと思います。例えば、雨が降りそうな時、欧米の保護者は天気予報の情報だけを伝え、傘を持っていくかどうかは子どもの判断に委ねると聞きました。一方、日本では、「傘を持っていきなさい」と子ども

図1 新課程の実施後の子どもの変化

Q. 新学習指導要領の実施によって、児童はどのように変わってきていると思いますか



*「増えた」の%

出典／2011年6月調査：ベネッセ教育総合研究所「小学校 新教育課程に関する教員調査」（全国の公立小学校教員868人対象）、2012年3月調査：ベネッセ教育総合研究所「小学校 新教育課程に関する教員調査—2011年度末調査—」（全国の公立小学校教員515人対象）、調査対象は各調査で異なる。

「感じたことを表現できる児童」が「増えた」と感じる先生は、新課程全面实施初年度の3月で約4割に達している。また、全ての項目で初年度6月に比べて3月の方が「増えた」の比率が高い。同調査では、「習得」を心がけた指導と併せて、「言語活動」（特に国語）と「活用」（特に算数）への心掛けも行われていることが明らかになっており、先生方の意識的な指導により、子どもたちに少しずつ思考力・判断力・表現力が育ってきているようだ。

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室 研究員 橋本尚美

自ら表現したくなる授業づくり

東京都稲城市立稲城第七小学校校長
味村和行

みむら・かずゆき◎東京都公立小学校教諭、大田区立大森第三小学校教頭、品川区立八潮南小学校校長などを経て現職。
稲城市立稲城第七小学校◎市の教育研究推進校の指定を受け、「根拠をもって説明できる児童の育成」思考力・表現力を育てる授業の追究」として主に算数の研究を進める。児童数427人。



ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室顧問

八木義弘

やぎ・よしひろ◎元東京都公立小学校校長。東京都教育委員会指導主事、東京都算数教育研究会会長、大学講師を歴任するなど小学校教育をリードしてきた、算数教育の第一人者。現在、「新しい算数教育研究会」常任理事も務める。

に指示してしまいがちです。何事においても、大人がそのようにしてしまうと、指示待ちの姿勢が身に付いてしまい、自分の思いや考えを表現する力は付いていかないと考えられます。

ただ、今の子どもたちを見ていると、人前に出ることは抵抗感がありません。むしろ、遠足のバスの中でカラオケを歌いたがる子どもは、昔は珍しかったのですが、今はマイクの奪い合いです。その点は変わってきていると思います。

しかし、多弁だから表現力が身に付いているとはいえません。肝心の表現する内容が、「良い悪い」や「好き嫌い」といった結論だけで、理由や根拠の説明が抜けてしまう子どもが少なくないようです。また、相手の話を聞かず、自分の言いたいことばかりを話そうとする姿も気になります。そのようなことを考え併せると、広い意味での表現力は育っているとは言えないと思います。

●表現力とは何か

言語や記号などで

自分の思いや考えを表出する力

——そもそも表現力はどのような力と捉え

図2 教師が感じる子どもの表現力と指導に関する課題

子ども自身の課題

- 自分の思いや考えを持っていても、それを相手に伝えることが苦手
- そもそも表現する意欲が乏しく、自信のない様子がある
- 覚えたことや練習したことは発表できても、友だちの意見をまとめて発表したり交流したりできない

指導の課題

- 教師によって「表現力」の捉え方にばらつきがある
- 教師に「何をどう表現させればよいのか」の共通理解がなく、発表させて終わりなど、表現することが目的化してしまっている
- 教師の話を丁寧にすると長くなってしまい、子どもが表現する場面が少ない
- 「間違えてもいい」という学級の雰囲気づくりが出来ていない

保護者の課題

- テレビやゲームなどに時間が割かれることで、家庭での親子の会話が少なく、語いが増えない
- 子どもの発言が文章として不完全でも、保護者が先回りして理解してしまう

*「VIEW21」小学版読者モニターへのアンケート結果から抜粋

るとよいのでしょうか。

八木 表現力は、自分の考えや気付きを、言語や記号などのさまざまな方法を使って、表に出す力といえるでしょう。身ぶり手ぶりなども表現の1つの方法といえますので、とても幅広く、定義は難しいと思います。表現する目的は、人との交流に加え、自分の思考を整理することもあると思います。

味村 社会生活における表現力と、教科学習における表現力は、少し異なると考えています。外に向けて発信するという点はどちらも同じですが、教科学習における表現は、表現をする前に自分で考えて整理することが多くなります。授業では、子どもがじっくり考えてから表現する場面を思い浮かべると分かるかと思えます。

八木 更に、表現力について考える上では、思考力との関係を捉える必要があります。新

課程においては、思考力と表現力は一体で補完関係にあることが読み取れます。表現という、分かりやすい発表の仕方やコミュニケーション方法などの技能をイメージするかもしれませんが、より思考を深めるための表現力と、技能としての表現力は分けて考える方がよいかもしれません。

味村 表現力は、「内容」「方法」「技能（スキル）」の3つの要素が深く関連していると思います。まず、自分が「内容」を理解していなければ表現できません。次に、どのような「方法」を用いると相手に伝わりやすいかを決める必要があります。例えば、「この数値は、数字で見せるよりも、グラフにした方が分かりやすい」といった判断です。そして、選んだ方法、この例ではグラフを作成する「技能」を習熟していることが求められます。

八木 確かにその3つがそろわなければ、相手に分かりやすく伝えるのは難しいでしょう。相手がどの程度理解しているかなどを踏まえて表現できるようになることが表現力といえるのではないのでしょうか。

●表現力はなぜ大切な

表現力が高まるに伴い
思考力も育つ

——表現力は、これからの社会を生きる上で特にどの場面が必要とされるのでしょうか。

味村 表現力を育てることはそのまま思考力を育てることであり、人間の成長に欠かせない教育です。また、自分の考えを発信し、相手の発信を受信するという行為は、コミュニケーションそのものです。意外と受信することの大切さは忘れられがちですが、表現力には、相手の考えを受け止めて返すことも含まれますから、発信力と共に受信力も高めていかななくてはなりません。特に、近年は価値観が多様化しているため、相手も自分と同じような考えとは限りません。グローバル社会の進展によって、多様な文化や価値観を持つ人々とコミュニケーションを取る機会も増えるでしょう。相手の話を聞き、理解する力も必要なのです。

八木 自分の話をするだけでは、誰にも受け入れられません。逆に、相手の言うことを何でも聞き入れる必要ありません。そうした相互関係を築く力も、これからの社会でますます重要になるでしょう。また、表現力が高まると、明確な根拠を示しながら話せるようになりまます。そうした力も、生きていく上で必須といえるでしょう。

●指導上の課題

教師がモデルを示すことで
良い表現が子どもたちにも広がる

——表現力を育むという観点で、これまで

の指導にはどこに課題があるのでしょうか。
味村 子どもの表現力を高めるために、授業で何をどのように表現させるのか、教師がもっと意識することが大切ではないでしょうか。そうすれば、子どもが発表をした時に、足りない部分は補い、適切な表現ならば認めて褒めることも出来ます。子どもがせっかくだと発言をしても、何にもせずに授業を進めてしまつと、良い表現の価値がクラスで共有されません。

八木 多くの教師が良い表現の基準を持っていないように思います。そのため、良い表現でも悪い表現でも、「よく出来ました」と発言したことだけを褒め、みんなで拍手して終わりとなつてしまうのです。しかし、発言することが表現ではないのです。

教師が表現の評価基準を持っていれば、「この言い方は良かったね」「ここが抜けているよ」など評価や指摘を出来ます。それを聞いている周りの子どもも、「そう言えばよいのか」と表現の幅を広げられるでしょう。

また、答えを出して終えてしまつた授業でも、表現力は豊かになりません。どのようにして答えを導いたのか、その過程や根拠をしっかりと伝えることが、論理的な思考を伴った表現といえるでしょう。

味村 一斉指導で表現力を付けるのは難しいと考える先生もいるようですが、そこは工夫次第だと思います。良い発言を取り上げるこ

自ら表現したくなる授業づくり

とで、他の子どもの学びを促すのは、その一例といえるでしょう。

表現と思考は、互いに補完し合う関係にあります。表現すること、思考が広がったり深まったりすることがあります。表現することによって思考が、逆に、考えることによって表現が、一歩ずつ前に進んでいく授業を目指したいと考えています。

八木 その時に、伝えたいという気持ちが表現の原動力となることを忘れないでいただきたいと思います。表現が目的化し、形骸化してはいけません。「こうしたら解けた!」「自分はこう考えた!」などと、子どもが何かを伝えたい授業を心掛けていただきたいと思えます。「はじめに……」「次に……」といった表現の型を示す「話型」があります。これは、話し方の技術を身に付ける上では効果的です。しかし、子どもの考えが当てはまらないこともあるので、話す内容によって型を柔軟に変えていくことも大切です。

● 授業で表現力を育むには ①
問題解決の過程に考える場と表現する場を交互に設ける

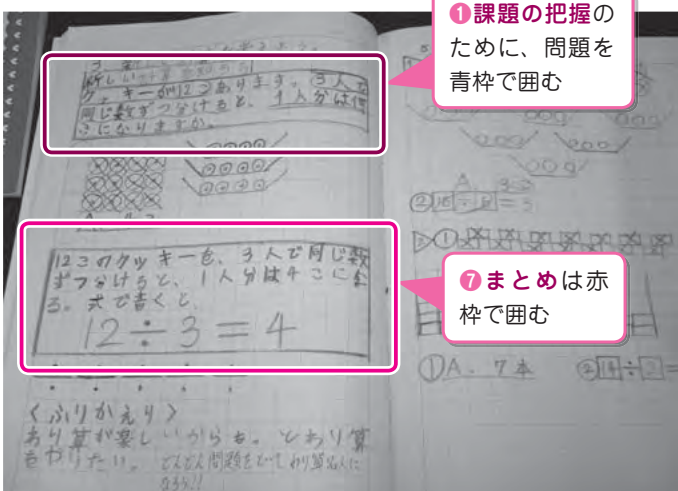
——表現力を育てるにはどのような指導が求められるのか、具体的なヒントをいただけますか。

味村 まず、思考力と表現力は補完関係にあ

図3 稲城第七小学校の問題解決型授業の流れ

- ① 課題の把握…(問題を青枠で囲む)
- 「個」の思考
- ② 解決の見通し…既習事項を確認するなどして解き方を考える
- ③ 自力解決…個々に問題に取り組む
- ④ 見直し…思考の過程を振り返り整理する
- 「集団」での思考
- ⑤ 発表・説明…考えを伝え合う
- ⑥ 検討…複数の考えや方法を比較・検討し、まとめあげる
- 「個」の思考
- ⑦ まとめ…(赤枠で囲む) 授業のまとめを記述する
- ⑧ 振り返り…授業全体を振り返り、気付きや感想を書く

* 稲城第七小学校の資料を基に編集部で作成



①課題の把握のために、問題を青枠で囲む

⑦まとめは赤枠で囲む

3年生の算数のノート。全教科・全学年でノートの取り方は共通化されている。慣れるに従って、自分なりの工夫をする子どもが出てくる

るため、表現力だけを育てようとはあまり意識しないことが大切だと考えます。本校の研究でも、思考力と表現力を相互に高め合う指導を目指しています。

例えば、授業に問題解決のプロセスを取り入れることによって、表現力や思考力の向上を図っています(図3)。流れを簡単に説明します。

最初に、①課題の把握があります。どの教科でも問題はノートに青枠で囲んで書くようにし、出発点となる問題意識を明確に持てるようにしています。問題提示の仕方によって子どもが取り組む姿勢は大きく変わりますか

ら、指導の工夫のしどころでもあります。

②解決の見通しは、既習事項などを確認し、「どのように解くか」を考える過程です。方法の見通しの時間を取ることで、次の③自力解決が出来やすくなる良さがありません。自分なりの見通しが不十分な場合は、解決できません。そこで、1人では進められない子どもには、教師が支援します。

続いて、④見直しです。自力解決までの思考過程を振り返って整理し、どのように説明すれば人に伝わりやすいかを考えるプロセスです。それまでの「個」による思考を、「集団」の思考に発展させる「つなぎの学習」として

非常に重要です。

見直しの内容を踏まえ、**5 発表・説明**で考えを伝え合い、**6 検討**して共通性を見いだしたり、より簡便な方法を模索したりして、より良い考えを追究していきます。

そして、**7 まとめ**は学習した内容を赤枠で囲んで、授業全体の**8 振り返り**を行います。青枠と赤枠で囲むことによって、問題とまとめをそれぞれ明確にし、問題解決の流れを強く意識させています。

このような授業の展開によって、表現と思考を補完し合いながら、両方の力を高めていくのではないかと考えています。

八木 稲城第七小学校と一緒に研究に取り組んで13年度で4年目になります。特に重要だと思うのが**4 見直し**です。答えが合っているかどうかではなく、自分がどのように解いたのかを整理することには大きな価値があると思います。いったん振り返ることによって、思考が整理され、分かりやすく表現する準備が出来るからです。

味村 見直しによって、不要な言葉を削り、より伝わる言葉を足すことによって、必要な要素が整理されて表現しやすくなります。表現力や思考力を研さんする上では欠かせないプロセスです。このような授業づくりに取り組んでから、子どもが自分の思いや考えを表現することに抵抗がなくなり、自分なりに工夫してノートを取る子どもが増えました。

● 授業で表現力を育むには ②

基礎・基本の定着の上に表現したい気持ちが育つ

八木 もう一つ、指導のポイントとして挙げたいのは、基礎・基本が定着していないと表現したい気持ちにはならないということです。例えば、掛け算九九を習得していなければ、2桁の掛け算や割り算は出来ません。それと同じように、表現力や思考力を育てるためには、基礎・基本の知識・技能の習得を大前提として、普段の授業を充実させていかなくてはなりません。授業を通して「考えた、分かった、出来た、解けた!」という感動が、人に伝えたいくなる気持ちにつながり、そこに表現力が育つからです。公式を単に覚えるだけではなく、きちんと活用できるようになるまで定着させる必要があります。

味村 私は、学習内容を身に付けるためには、「出来て、分かって、活用できる」という3段階を経ることが必要だと考えています。つまり、「公式に当てはめて計算できる」だけでは十分ではなく、「どのように公式が成立しているかが分かる」、そして「新たな問題が出た時に活用できる」というプロセスを経てこそ、次の学習の根拠につながります。

八木 基礎・基本は机上の学習だけで習得するものではありません。関連する体験活動を楽しむことで知識・技能の習得はより確実な

ものになります。一例ですが、距離と時間から速さを計算する学習をした後、実際に校庭で30メートルを走ってタイムを測り、秒速を求めるといった活動をする、算数が苦手な子どもでも実感を伴って公式を理解していました。秒速の求め方を理解できた子どもが、次の授業で同じような問題を解けると、「自分で解けた」ことが、大きな喜びや自信につながります。

● 保護者との連携

会話の楽しさを実感させることが表現力の高まりにつながる

—— 表現力を育むために家庭への働き掛けなどで出来ることはあるでしょうか。

味村 語いを増やすことは、家庭と連携できると思います。豊かな表現力に、豊かな語いは欠かせません。仮に、3色しか知らなければ、他の色を言い表すことは出来ません。それと同じように、語いが豊富になれば、自分の考えや気持ちを豊かに表現できます。語いは普段の生活が大切です。保護者には家庭での会話を意識してほしいと協力を求めています。

八木 おっしゃる通り、語いは現象を凝縮したもので、増やすことで考える基礎を獲得していくという側面があります。家庭ではぜひ子どもと会話する場と時間を増やすように努

自ら表現したくなる授業づくり



力してほしいと思います。会話の内容は、学校での出来事やスポーツなど、子どもの好きなことで構いません。テレビを見ていても、「今の場面は良かったね」「分かりやすい説明だったね」などと、価値観を伝えて共有すれば、会話のきっかけになるでしょう。出来れば単語ではなく文章で、きちんと理由と共に伝えるような会話を心掛けてほしいと思います。特に、低学年の子どもは、興味があるこ

とをすぐに話したくて、時系列を無視して話すことがよくあります。そうした場合には、保護者が話を整理してあげるとよいでしょう。更に、子どもと話す時は、相づちを打つと共に、「それからどうなったの？」などと話を促し、よく聞いているという態度を示し、聞き上手になることも大切です。

大切なのは、コミュニケーションの楽しさを感じさせて、「話したら楽しかった」と思わせることです。心地よいことは繰り返しなくなるからです。もちろん、会話だけではなく、楽しかったことなどを書く機会を与えるのも良いことだと思います。

味村 他にも、粘り強さや諦めない気持ちなどが家庭で育つと思います。諦めずに取り組んだ問題がようやく解決できた時の喜びは格別で誰かに伝えたくなるものです。普段から保護者が「諦めずに頑張りなさい」と働き掛けることには大きな意味があると思います。

● 学校全体で取り組むために 1つの教科で研究したことを 学校全体に広げていく

—— 表現力を高める指導を取り入れるにあたり、校長先生をはじめ、管理職の先生方に心掛けていただきたいポイントはありますか。

八木 まず、表現力や思考力は生きていく上で重要な要素であることを、教師や保護者に

しっかり情報提供をしていたらいいと思います。教師や保護者一人ひとりの意識を高めることが、何より重要です。

しかし、理念だけで教育は変わりません。先生方の協力を得ながら、それを具体化していくことは管理職の先生方の大切な役割です。ただ、一気に全教科で取り組むのは難しいため、1つの教科で研究したことを学校全体に広げていくという進め方が良いのではないのでしょうか。

味村 楽しい授業をすると、子どもは表現しなくなるものです。分かったりうれしかったりしたら、誰かに伝えたくなるからです。もともと、表現力は感情や意欲との関連性が深いのでしよう。

先生が「書いてみよう」と言った時に、子どもが嫌がる授業は失敗と言えます。楽しい授業では、子どもには書きたいことが出てくるからです。また、担任や学年が変わるたびに学びの型が異なっては、子どもは安心して学べません。私は、問題解決型の授業づくりを学校全体に浸透させることを、校長として強く意識しています。

八木 校長先生が自分の得意分野で授業をして先生方に見せることも、時には必要ではないでしょうか。目指す授業の方向性や教材を見る目を伝えたり、会話のきっかけになったりするでしよう。

—— 本日はありがとうございました。

算数での学び合い活動を通して 考えを論理的に表現する力を育む

茨城県 小美玉市立羽鳥小学校

答えは出せるが、自分の思考の過程を説明できないという課題を抱えていた小美玉市立羽鳥小学校。算数を中心に学び合い活動を取り入れ、お互いに考えを伝え合う指導に力を入れた。授業改善に伴って、子どもは自分の考えを積極的に表現するようになっていく。

取り組みのねらい

- 自分の考えを話したり書いたりする力を高める
- 熟考が求められる問題に諦めずに取り組める姿勢を育てる

取り組みの内容

- 「個人→ペア→グループ→全体」という過程を設定することで、算数で学び合い活動を充実させる
- 6年間の基本的な学習形態を「羽鳥スタイル」として統一する
- チーム・ティーチングや習熟度別指導など指導形態を工夫する

取り組みの成果

- つなぎ言葉を使い、根拠を論理的に説明できるようになった
- 友だちに教えたり、教えられたりする喜びを実感するようになった
- 人間関係が良好になった

S c h o o l D a t a

◎1873(明治6)年開校。学校教育目標は、「進んで学び、心豊かでたくましく生きる児童の育成」。基礎・基本の定着と学び合いを通して、自己解決能力と学力向上に努めている。



校長 柴山 久先生

児童数 474人 学級数 17学級(うち特別支援学級3)

所在地 〒319-0123 茨城県小美玉市羽鳥932

TEL 0299-46-0004

URL <http://www.city.omitama.ibaraki.jp/hatori-e/>

公開研究会 未定

● 取り組みのねらい

学び合いを通じて 自分の考えを伝える力を育む

小美玉市立羽鳥小学校は、児童数474人と市内最大規模の小学校だ。校区には、3世代が一緒に暮らす家庭が中心の古くからある地域と、新興住宅地とが混在している。

子どもたちは明るく素直で活発であり、言われたことには一生懸命に取り組む。反面、自分から考えたり工夫したりすることには消極的な姿が見られた。学習面では、知識や技能は比較的身に付いてはいるが、自分の考えを話したり書いたりする力に課題があった。

自ら表現したくなる授業づくり

教務主任の今泉賢司先生はこのように話す。

「答えを出すのは得意なのですが、思考の過程をノートにまとめたり、友だちに発表して伝えたりすることが苦手な子どもが少なくありませんでした。考えが十分に深まっていないという印象もありました。また、熟考が求められる問題では、すぐに諦めてしまう姿も見られました」

中でも、算数に課題があった。県の学力診断テストの結果では、算数的な考え方が求められる問題や記述式の問題の正答率が低かったという。そうした実態を踏まえ、2009年度から算数を通して学び合いを促し、思考や表現を高める研究に取り組んでいる。

「算数は答えにたどり着くまでに多様な考え方が出来るため、子どもの学び合いを通して考えたり伝えたりする力を伸ばしやすいと考えました。1年生から6年生まで学習する教科なので、全校で取り組むのにも適していました」（今泉先生）

研究の前提として、同校は思考力と表現力は互いに補完し合う関係であると捉える。12年度まで研究主任を務めた市毛実先生は次のように説明する。

「学習指導要領の算数科の目標に『筋道を立てて考え、表現する能力を育てる』と書かれているように、思考を具体化したものが表現だと思えます。そこで両者を重ね合わせながら同時に高めていく指導を検討しました」

● 取り組みの内容

学習形態を統一し、基礎・基本の定着を図る

思考や表現の土台になると考えたのが、基礎・基本の定着だ。もともと、計算などは得意な子どもが多かったが、家庭学習や計算練習を充実させることで定着を促している。

また、基本的な学習形態を「羽鳥スタイル」として統一した。「問題」「見通し」「自分の考え」「友だちの考え」「まとめ」「練習問題」「ふりかえり」という問題解決のプロセスを明確にし、子どもが問題解決の流れを意識して学べるようにした(図1)。「羽鳥スタイル」は、それぞれの頭文字を取った「もみじとまれふ」

図1 「羽鳥スタイル」による算数ノートの使い方(5・6年生)

日付はわくのそとに書く。

4/10

単元名(または小単元名)←(単元のはじめだけ書く)

も	・問題文は、青線でかこむ。 ・もとめることに赤の二重下線を引く。	
見	・答え(結果)の見通し ・解き方の見通し	
目	・絵や図で ・数直線で ・表やグラフで	・言葉の式にあてはめて ・式で ・その他の考え方で
友	・友だちのよい考えを書く。	
ま	・今日の学習でわかったことを書く。 ・まとめは、赤線でかこむ。	
れ	・練習問題を解く。	
ふ	・今日の授業の感想を、言葉で書く。	

「問題」「見通し」「自分の考え」「友だちの考え」「まとめ」「練習問題」「ふりかえり」を、も～ふの記号で表している

*同校の資料を基に編集部で作成

「授業の見通しを持たせることによって、主体的に学ぶ姿勢を育てたい」というねらいがありました。実際、毎回指示をしなくても、見通しを立てて課題を解決しようとするなど、自ら進んで学ぼうとする姿が見られるようになりました(今泉先生)

他に、賛成・反対・付け足しなどで自分の意見を表現するハインドサインなども発達段階に応じて取り入れている。

『羽鳥スタイル』は全教科で取り入れています。担任や学年が変わっても学習形態が変わら



小美玉市立羽鳥小学校
市毛実 いちげ・みのる
6学年主任。「明るく楽しい学級をつくるために、子ども同士のコミュニケーションを充実させる」



小美玉市立羽鳥小学校
今泉賢司 いまいずみ・けんじ
教務主任。「子どもの力を引き出し、『自分で出来た』という経験をいろいろな場面でさせたい」



小美玉市立羽鳥小学校校長
柴山久 しばやま・ひさし
「思いやりのある子どもを育て、明日が待たれる笑顔あふれる温かい学校をつくる」

ないため、子どもはスムーズに学習に入れるようになりました」(市毛先生)

「羽鳥スタイル」は、毎年、子どもの実態に合わせて改善しているが、それと併せて、いかに学び合いを促すかを検討した。指導形態の工夫もその1つだ。子どもに合った課題を、教師の目が行き届くような体制で指導すると学び合いが活発化するため、チーム・ティーチングや習熟度別指導を、学年や単元に応じて取り入れている。

段階的に学び合いを深め 思考と表現を広げていく

学び合いそのものの研究も深めた。

「学び合いを研究の中心と位置付けているという試しました。その中で、思考や表現を深めるためには『個人↓ペア↓グループ↓全体』という学び合いの過程を設定することが有効だと考えるようになりました」(今泉先生)

学び合いの出発点として、まず個人学習の時間を十分に取り、自力解決に取り組みさせる。自分の考えをしっかりと持ち、自信を持って学び合いに臨ませることがねらいだ。子どもが1人でも考えを深められるように、発達段階に応じて課題提示の仕方を工夫する。

「低学年は具体物によって視覚的に訴えたり、手で操作できたりする課題を中心にし、学年が上がるにつれて抽象的な考え方が必要な課題を増やしていきます」(市毛先生)

個人学習で十分に考えを深めた上で、ペア学習に移る。ここでは、自分の考えを相手に伝えることに重点を置く。相手と考えが同じ場合でも、改めて自分の考えを言葉で伝えるように指導している。自分の考えを明確にすることがねらいだ。

「自分の考えになかなか自信が持てない子どもがいますが、ペア学習によって互いに確認し合うことで安心感が得られ、授業に意欲的になります」(市毛先生)

低学年の子どもは自分なりの言葉で相手に伝えることが難しい。そこで、「ペア学習のしかた」として、自分の思考を表現するための「型」を設定し、ペア学習が進まない子どもには「型」を用いるよう指導している(図2)。

次に3、4人でグループ学習を行う。グループの中で共通点や相違点を探ると共に、妥当性(正しいか、正しくないか)、効率性(どの方法が簡単か、より良いか)を話し合う学習活動だ。限られた時間の中で、他の子どもの考えを聞き取り、比較することは難しいため、発表の順番や友だちの意見の聞き方などのマニュアルを設けている(図3)。

「それまでに個人学習とペア学習で、ある程度、考えがまとまっているため、学び合いの過程の中では、グループ活動が最も活発な話し合いとなります」(今泉先生)

学び合いの最終過程が全体学習だ。自分の考えを深めると共に、訂正したり、追加した

図3 話し合いのマニュアル 中学年

発表する児童

- 1 右角の児童から順に、時計回りで発表する。→質問に答える。
- 2 答えが合っているかどうか確かめる。

→間違っていると思ったとき→どこをどう直せばいいか話し合う。

- 3 複数の考え方が出たとき、一番いい考え方とその理由をまとめる。

発表を聞く児童

- 1 自分の考えと違うところを確かめる。→分からない時は聞く。
- 2 答えが合っているかどうか確かめる。

→間違っていると思ったとき→どこをどう直せばいいか話し合う。

- 3 複数の考え方が出たとき、一番いい考え方とその理由をまとめる。

*同校の資料を基に編集部で作成

図2 ペア学習のしかた 2年生

- 1 わたしは(ぼくは)、○○でかんがえました。
- 2 はじめに、…………。
- 3 つぎに、…………。
- 4 だから、こたえは○○です。
- 5 しつもんやつけたしがあったら、話してください。

- わたしと(ぼくと)おなじところは、○○です。
- わたしと(ぼくと)ちがうところは、○○です。
- ○○さんのかんがえが、かんたんで分かりやすいと思います。

- 6 ありがとうございます。

*同校の資料を基に編集部で作成

自ら表現したくなる授業づくり

りすることをねらいとしている。この学習活動では、発表をするのは数人の子どもだが、ハンドサインを用いるなどして、全員が学び合いに参加できるように配慮している。

では、算数の授業では、具体的にどのような学び合いを取り入れているのか。

4年生の長方形を組み合わせた形(■)の面積を求める授業では、自分が考えた方法を図や式などで自由に表現させた。子どもたちからは、「2つの長方形に分ける」「大きな長方形から凹んでいる部分を引く」「2つを組み合わせてきれいな長方形を作ってから2で割る」「1平方センチメートルずつ数える」など多様な解決策が出て、学び合いが活発に行われた。

5年生の容積の単元では、発展学習の授業で難易度別に3種類の課題を事前に提示し、子どもに選択して取り組ませた。この授業では、グループごとに考えをまとめ、自由に移動して他のグループの考えを聞いて回るといふポスター・セッション方式を取り入れた。自分が選んだ課題に意欲的に取り組み、考えを相手に懸命に伝えたり、他の子どもたちの考えを聞こうとしたりする姿が見られた。

● 取り組みの成果

型から発展させ、自分の言葉で表現する子どもを育てたい

授業改善に伴い、子どもが表現する力や姿

勢は目に見えて高まっている。

「理由は……」「だから……です」など、つなぎ言葉を使って根拠を論理的に説明できるようにになりました。算数以外の教科でも、自然な話し合いによって学びを深め合うようになっていきます(市毛先生)

子どもたちは、友だちに教えたり教えられたいすることが喜びに満ちた体験だと実感しているようだ。

「充実した学び合いの後には、子どもはとも満足そうな表情をします。自分の考えや気持ちを相手に伝えようとする態度が育ち、普段の生活の中でも友だちを思いやり、優しい言葉を掛けるなど、人間関係にも好影響が及んでいます(今泉先生)

今後の課題は、学び合いの「型」から一歩進み、自分の考えを自分の言葉で表現できる子どもを増やすことだ。そうした力は、中学年くらいから付けられるという感触を得ているが、現状は高学年でも十分ではないという。校長の柴山久先生は次のように語る。

「表現力や思考力は、まだ十分に高まっているとはいえません。今年度は、従来の算数の取り組みを続けながら、言語活動の中心となる国語をテーマとして研究を進め、自分の言葉で考えを伝える力を付けていきます。こうして学び合いを軸とした『わかる授業』づくりに努めることで、自ら目標に向かっていく力を育てたいと考えています」

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

研究のけん引役として、リーダーシップを取ることに努めています。新しい情報を取り入れ、子どもの理想像を描くなど、PDCAプランを作成しながら、先生方を引っ張っていきたいと思います。学校を円滑に動かすために、ミドルリーダーを育てることも大切にしています。

また、トップダウンばかりではなく、先生方の声に耳を傾け、良いものを取り入れながら、資質や力量をよく見て、適材適所を心掛けています。

校長 柴山久先生

ミドルリーダーの役割

最も大切にしているのは、チームワークです。これが崩れると、何をやっても機能しなくなってしまいます。そのために必要なのが教師間のコミュニケーションです。先生方が考えていることを自分なりに理解し、校長や教頭と相談しながら、さまざまな取り組みを進めています。

先生方のモチベーションを高めることも、私の役割です。本年度は研究教科が変わったので、改めて協力しながら取り組みを深めていきます。

教務主任 今泉賢司先生

主体性を育む授業づくりが 自らを表現する素地になる

東京都 福生市立福生第五小学校

福生市立福生第五小学校は、子どもの主体的な学習態度に着目した校内研究を進めてきた。その過程で主体性を伸ばすには、自らを積極的に表現する活動が不可欠と実感し、そのための授業改善や指導の工夫に取り組んでいる。授業や指導の変化に伴い、子どもの表現力は高まりを見せている。

取り組みのねらい

- 「知りたい、わかりたい、伝えたい」という主体的な学習態度を育てる
- 引っ込み思案な子どもの発言を促し、全員が参加している実感を持てるような授業をつくる
- 答えだけではなく、理由や根拠を説明できるようにする

取り組みの内容

- 意識的に一定量以上、話したり書いたり表現する学習を取り入れる
- 「15の手だて」を設定し、学校全体で授業の構成を見直す
- 多様な考え方に触れられるような発問や話し合いの場面を工夫する

取り組みの成果

- 主体性が向上し、積極的に表現する子どもが増えた
- 「書く」ことへのハードルが低くなり、作文などの文章量が飛躍的に増えた
- 自分とは異なる考えを受け入れられるようになった

● 取り組みのねらい

引っ込み思案な性格を克服して 自分を表現する姿勢を育てる

東京都にある多摩川沿いの豊かな自然環境に囲まれた福生市立福生第五小学校。周囲に野鳥が多く飛来するため、開校当初から愛鳥活動を通じた情操教育や環境教育に力を入れ、2011年度には「野生生物保護功労者」の環境大臣賞を受賞した。保護者や地域社会は学校活動に協力的であり、12年には五小サポートによって教育の充実を図っている。子どもは、優しい心を持ち、教師の指示には真面目

S c h o o l D a t a

◎1969(昭和44)年開校。2011年度からの研究成果を踏まえ、「関わりあいを通して学びを深める言語活動の研究」をテーマに研究を深める。2013年度から3年間、東京都「言語能力向上推進事業」指定校。



校長 栗林昭彦先生

児童数 267人 学級数 13学級(うち通級指導学級3)

所在地 〒197-0004 東京都福生市南田園1-2-2

TEL 042-552-0256

URL <http://academic4.plala.or.jp/fussa-5e/>

公開研究会 東京都小学校放送教育研究会研究発表
2013年12月10日(火) 予定

自ら表現したくなる授業づくり

に従うが、引つ込み思案な傾向があるという。栗林昭彦校長はこのように説明する。

「基本的な生活態度は身に付いており、学習にしっかり取り組みますが、自分の考えを表現したり、話し合つて考えを深めたりするのは得意ではありません。また、素直で言われた通りに出来ることは、小学校段階ではよくても、今後、社会に出ていくことを考えると、多様な価値観の中で自分の考えをしつかり持つてほしいという思いがありました」

基本的な学習態度は出来ているのだから、自ら考え表現する主体性が育まれば、学力はより高まるのではないか……。そのような考えから、11年度に「主体的な学習態度を育てる指導の工夫」をテーマとした校内研究に取り組み始めた。

● 取り組みの内容

一定量の「走りこみ」で表現力の土台が築かれる

主体性を伸ばすために重点を置くのが、書く・話す学習を積み重ね、それまで受信型だった子どもに発信力を付けることだ。

「書く・話す・読む」を一定量しなければ、自ら表現する力は育たないと考えました。これは『走りこみ』のようなものかと思えます。走りこみが十分でないと、文部科学省の『全国学力・学習状況調査』のB問題を前にしても、読んだり書いたりする気が起きないので

はないでしょうか」（栗林校長）

同校は、授業の構成を見直し、子どもが自ら考えたことを、書いたり話したりして表現する時間を大切にしました。授業改善の過程で徐々に形作られたのが、主体性を育むためのポイントをまとめた「15の手だて」だ（図1）。これは、「学習環境」「教材提示」「特別支援教育」の3つを柱に、それぞれ5項目が整理されている。こうした手だてを用い、どのように授業を改善しているのかを見てみよう。

どの教科でも行われている手だての1つが、C-1「授業の流れの提示」だ。全ての教室の黒板にホワイトボードが張つてあり、授業の冒頭、そこに授業の流れを示す。例えば、国語では「教科書を読む」「○○の場面について考える」「意見交換をする」「まとめ」といった展開を書き込む。

「事前に流れを示し、見通しを持って学ぶ

図1 「15の手だて」		
A 学習環境	1	学習規律の確立（あいさつの仕方・聞くときの姿勢・発表の仕方など）
	2	教室環境の工夫
	3	個人で考える時間の設定
	4	学び合う活動の設定
	5	間違いを認め合う環境作り・声かけ
B 教材提示	1	五感に訴える教材の活用
	2	教材提示機器の活用
	3	具体物や実物を使った活動
	4	振れ幅をもたせるような発問
	5	学習振り返りカードの活用
C 特別支援教育	1	授業の流れの提示
	2	課題の明確な提示
	3	課題に迫る手だてのスマールステップ化
	4	短く具体的な指示
	5	学習内容の視覚化

*同校の資料を基に編集部で作成



福生市立福生第五小学校校長
栗林昭彦 くりばやし・あきひこ
「学校経営も教科指導も、常に一歩先を見て、計画的かつ丁寧に積み上げていきたい」



福生市立福生第五小学校
研究主任 押原奈穂実 はいばら・なおみ
「周囲への思いやりがあり、最後まで諦めずに頑張り抜く子どもを育てる」



福生市立福生第五小学校
5学年担任 小檜山健 こびやま・けん
「1日1字を学べば1年で365字。また、子どもも教師も自然体で過ごせる学校をつくる」



福生市立福生第五小学校
4学年担任 土屋俊貴 つちや・としたか
「子どもと共に前へ。若さを前面に出し、子どもに近い目線で共に前へ進みたい」

のは、特別支援教育で用いられている手法です。通常の学級でも生かせるのではないかと考えて取り入れたところ、多くの子どもが自分の中で授業の「型」を意識し、次の展開を考えて、一つひとつを消化しながら学べるようになりました」（栗林校長）

次に、B-4「振れ幅をもたせるような発問」を見てみよう。振れ幅のある質問とは、一問一答ではなく、さまざまな答え方がある質問だ。正解が1つではないため、子どもの思考や表現が広がりやすい。4学年担任の土屋俊貴先生はこのように説明する。

「考えが出て、そこで授業を止めずに、更に考えを深め、周りと共有するために『どうしてそう思ったの?』と、理由や根拠を聞いたり、他の考えを引き出したりしています」

例えば、国語の音読劇で、登場人物が近づいてくる場面を、次第に声を大きくすることで表現した子どもがいた。土屋先生が「どうして大きな声で読んだのだろうね」と質問すると、他の子どもも意味を理解し、表現を工夫することを意識するようになった。

また、A-3「個人で考える時間の設定」とA-4「学び合う活動の設定」は相互的な関係にある。

「自信を持って自分の考えを表現するためには、個人で考える時間の設定が大切です。事前に考えておくことで『安心感』が高まります」(土屋先生)

個人で考える時間は、教師が子どもの理解度などを把握する時間でもある。研究主任のはら原奈穂実先生が言う。

「机間指導で良い表現を見つけたら、『後でこれを発表しようね』などと伝え、自信を持たせます。また、発表が正しくなくても、そこから広がる考えに着目させるなどして、間違いから気付く大切さを伝えています」

12年度の4年生の国語では、学び合う活動として話し合いに力を入れた。5学年担任の小こ檜山健先生が説明する。

「昨年度に担任をしていた学年は単学級の

こともあり、人間関係が固定化し、年度始めは、一部の子ども意見に流される傾向があった話し合いが成立しませんでした。そこで、少数意見の大切さ、また賛成することだけが正しいわけではないことを伝え、5年生になってディベートが出来るように素地をつくっていきました」

初めは、発言に対して「こういう理由で賛成する(反対する)」と話させるなど、話し合いの型を示した(写真)。また、司会者は、教師が作成したひな形を読み上げて会を進行することから始めた。

「根気よく続けていると、次第に話し合いに慣れ、司会者が異なる意見を結び付けられるようになりました」(小檜山先生)

5年生になると、話し合いからディベートに移した(図2)。大きな違いは、ディベートでは、審判を設定し、「分かりやすかったか」「筋が通っていたか」などの基準で点数化し、結論を出すことだ。こうしたゲーム的な要素が加わって意見交換が活性化したほか、「自分とは異なる考えが正しいとされることもある」と実感するようになった。それにより子ども人間関係が円滑になり、日常生活でのトラブルは目に見えて減ったという。

**気軽に詩を書かせることで
語いを豊かにし、観察力を育む**

4年生の表現活動でもう一つ注目したいの

図2 5年生のディベートのルール



ルールと約束

- 決められた順番で、決められた時間内で発言する
- 必ず司会者に指名されてから発言する
- 他者の発言中に発言はできない
- 討論の結果は、審判の判断に従う
- 相手のマイナス点ばかりをつくるのではなく、それを自分たちの正論に生かすように、作戦タイムを活用する
- 審判は、判定表に基づき公平に判定する
- 司会者ははっきりと指名して、話し合いをスムーズに進行させる

*同校の資料を基に編集部で作成



写真 グループでの話し合いの場面。司会者は持ち回りで、全員が担当する。最初は「型」通りの話し合いが中心だったが、慣れるに従って自由に考えを表せるようになった

自ら表現したくなる授業づくり

が、詩を書くことだ。

年度初め、作文や読書感想文を書く、漢字の間違ひが多く、400字詰め原稿用紙の半分も埋まらず、書く力に課題を抱えていることが分かった。そこで、小檜山先生は、「家族」「担任の先生」「校長先生」「学校」などをテーマに、1年間で15本以上の詩を書かせた。表現する意欲を引き出すために、「何を書いてよい」と伝え、書くことを楽しむことに力点を置いた。時には宿題にして、保護者には詩を書く上でのポイントを伝え、簡単なアドバイスしてもらえようにした。

こうした指導の結果、文章量は飛躍的に増え、3学期には少ない子どもでも原稿用紙1枚、多い子どもは3枚も書くようになった。「習った漢字は使う」ことをルールにしたため、辞書を使う頻度も増え、漢字や語いの知識も増えた。

「語い力」が豊かになっただけでなく、どのような側面からテーマについて語るかという「観察力」、更には、次は何を書くかという「好奇心」などが育ったと感じます（小檜山先生）

● 取り組みの成果

**具体的な改善の手だてが浸透し
授業が変わり、子どもが変わった**

取り組みを通じ、子どもが主体的な姿勢を見せる場面が多くなったと、栗林校長は話す。

「分かりやすい展開を心掛けると共に、主体性を発揮する場面を増やしたことで、引込み思案な子どもが発言したり、それまで授業に参加していなかった子どもが前向きに学習するようになりました」

学校全体で授業改善への共通のベクトルを持つことで、教師の意識も変わった。

「どの先生も『授業を良くしたい』という思いは持っているのですが、具体的にどう変えればよいのかが分からないことがあります。特に若手の先生は、自分の少ない経験の中だけで判断してしまうこともあります。それが、学校全体で研究を進めることで、具体的な改善の手だてが示され、授業が大きく変わりました。それに伴って子どもが変わっていくという実感もありました」（栗林校長）

2年間の「走りこみ」の成果として、表現力の土台は身に付いてきた実感があり、それを基に、13年度は更に表現の質を高めるために言語活動の研究に取り組んでいる。

「より効果的な学び合いの方法を研究して授業改善を進めるほか、子どもが言葉に触れる機会を増やしたり、他学年との読み聞かせ交流や手紙交流を行ったりするなど、表現する必然性を設けていきたいと考えています」（拝原先生）

自分の考えを積極的に表現できる子どもを育てる同校の取り組みは、次なるステップに入った。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

先生方が意欲的に研究を進められるよう、ビジョンを示し、情報を提供することが、校長の務めだと考えます。そのために、「先生一人ひとりにこのような力が付く」「授業がこのように変わる」など、研究の意義を具体的に伝えていきます。

保護者や地域社会には、学校がよく見えるように、集会やお便り、ホームページなどで多くの情報を伝えるように心掛けています。

校長 栗林昭彦先生

ミドルリーダーの役割

校長の学校経営方針に基づき、どのような児童像を目指すのかを、常に念頭に置いて研究を進める必要があると考えています。全員が納得できる研究となるように調整することも研究主任の役割です。

職員室では、分からないことは分からないと言える雰囲気づくりに努めています。ベテラン教師が若手教師に「授業を見に来ませんか？」と提案するなど、教師同士が学び合える環境を大切にしたいと思います。

研究主任 拝原奈穂実先生

「自分たちに何が出来るのか？」を 考え、表現し、行動する力を育む

福島県 会津若松市立松長小学校

2011年度からESD（持続可能な開発のための教育）活動に力を入れる会津若松市立松長小学校。子ども一人ひとりが「自分たちに出来ること」を考え、アイデアを出し合って社会貢献につながるプロジェクトをつくり上げていく。こうした活動を通し、子どもは自信を持って自分の考えを表現できるようになってきたという。

取り組みのねらい

- 規範意識を持ち、それを実行できるようにする
- 相手の話をしっかり聞く姿勢を育てる
- 人間関係を広げ、異なる価値観を持つ人々と共生できるようにする

取り組みの内容

- 表現力やコミュニケーション能力の土台となる人間関係を育てる
- 広い世界と自分たちが住む地域に共通する課題を見付けさせ、「自分たちに何が出来るのか？」を考えさせる
- 諸外国の小学生とSNSを介して交流する

取り組みの成果

- 子どもたちが自分の考えを生き生きと表現するようになった
- 人の意見を大切にするようになった
- 学校以外の人たちとのかかわりを通して、コミュニケーション能力が育まれた

S c h o o l D a t a

◎1990(平成2)年開校。教育目標は、「『あいっこ』としての誇りを持ち、夢に向かって、ともに学ぶ児童の育成」。ESDやSNSを取り入れるなど、新たな教育活動にチャレンジしている。



校長 石綿吉男先生

児童数 366人 学級数 14学級

所在地 〒965-0001 福島県会津若松市一箕町4-9-2

TEL 0242-32-2490

URL <http://www.matsunaga-e.fks.ed.jp/>

公開研究会 2013年11月15日(金) 予定

● 取り組みのねらい

自分の思いを表現し 相手の話を聞く姿勢を育てたい

会津若松市立松長小学校は、1990年に開校した比較的新しい学校だ。校区には、新しく開発された地域もあり、昔からの住民と新しく移り住んできた住民とが混在し、また、会津大の教員宿舎があるため、外国籍の子どもが在籍するなどの特徴がある。

子どもは、地域に坂道が多いこともあり、体力があり元気いっぱいだ。また、市が会津藩の子弟教育の方針を基に策定した「あいっこ宣言」が浸透しており、規律規範の意

自ら表現したくなる授業づくり

識が根付いてると、石綿吉男校長は話す。

「この宣言には『人をいたわります』『卑怯なふるまいをしません』などの6条と、『ならぬことはならぬ』といった、子どもの心を育てる言葉が並びます。子どもはそれを大切にし、あいさつやお礼の言葉をきちんと言いますし、困っている友だちに手を貸す姿もよく見られます。しかし、暗唱が出来ても言動を全て伴わせるのは難しいものです。もっと意味を深く理解させたいと考えています」

また、子どもたちにやや飽きっぽい気質が見られ、相手の話をじっくり聞けないことも、石綿校長は課題として挙げる。

「本校にも外国籍の子どもがいるように、今後、外国人と共に何かをする機会は多くなると思います。異なる価値観の人々と共生するには、人間関係をきちんと築く力が必須でしょう。しかし、そのためには相手の話に耳を傾けることが大切です。コミュニケーション能力を育てていくために、小学校段階ではまず自分を表現すること、そして相手の話を聞く態度を身に付けたいと考えました」

同校では、コミュニケーション能力を育む前提として良好な人間関係が必要と考え、どの子どもも「自分は話してもいいんだ」と思えるような学級の雰囲気づくりを心掛ける。4学年主任の細谷彰宏先生はこう説明する。

「自分の考えや思いを口に出すのが怖いという子どもがいます。そのような子どもには

教師が発言の手助けをして、学級や集団の中で意見を聞いてもらえて共有されたという喜びを感じさせることで、『話したい』という気持ちを育むようにしています」

● 取り組みの内容

正解のない課題だからこそ 思考力や表現力が鍛えられる

子どもが自分を表現し、他者とのコミュニケーション能力を育む活動の一環として、同校が2011年度から取り組んでいるのが、ESD (Education for Sustainable Development) Ⅱ 持続可能な開発のための教育) だ。同校は、ESDに基づく活動を「総合的な学習の時間」で行っている。これは、持続可能な社会を築く担い手を育てる教育のことであり、環境、福祉、伝統文化、産業など、地域のさまざまな課題解決に向けた活動を通して、子どもが、自然や社会と触れ合い、多くの人と交流しながら、知識や知恵を学び、考える力や行動力などを身に付けていく。08年に政府が策定した教育振興基本計画ではESDの推進を重要施策とし、新課程には持続可能な社会の構築の視点が盛り込まれている。

12年度の6年生の活動を見てみよう (P.20 図)。出発点は「私たちが住む地球にどんな問題が起きているか」だ。子どもは図書館やインターネットで調べ、人種差別、戦争、環境破壊などの分かった結果を発表した。子ど



会津若松市立松長小学校校長
石綿吉男 いしわた よしお
「子どもが『学校に來たい』、保護者が『預けたい』と思える、夢や可能性に向かって頑張れる学校をつくる」



会津若松市立松長小学校
鈴木淳 すずき じゅん
教務主任。4学年担任。「毎日子どもが笑顔で楽しく通え、その笑顔で保護者も笑顔になれる学校や学級をつくる」



会津若松市立松長小学校
那知上恵 なちがみ けいいち
研究主任。日本語指導学級担任。「世界に目を向けて、グローバルに活躍できる人を育てたい」



会津若松市立松長小学校
加藤久子 かとう ひさこ
5学年主任。国語科主任。「『自分と厳しく他人に優しく』をモットーに、素直で伸び伸びとした子どもを育てる」



会津若松市立松長小学校
細谷彰宏 ほそや あきひろ
4学年主任。「子どもたちが助け合い、人のために働くことの尊さを感じられる学級をつくる」



会津若松市立松長小学校
小川百合子 おがわ ゆりこ
3学年担任。「毎日『学校が楽しい』と子どもが言う学級をつくる。また、『ならぬことはならぬ』を徹底する」

もの関心が高まったところで、教師が「私たちの住む地域にはどんな問題が起きているのか」と投げ掛けた。子どもが家族に聞き取り調査をする一方、会津大に協力を依頼し、

チュニジア、台湾、スリランカ、ベトナムの留学生を招き、異文化交流のワークショップを開いた。取り組みを担当した那知上恵一先生はこう説明する。

「留学生には、自国の文化や衣食住などの他に、自国が抱える問題についても話してほしいとお願いました。子どもに、他国を知ることによって、自分の住む地域の課題に気付いてほしかったからです」

その後の話し合いで、どの国にも共通してゴミ問題があることが挙がり、地域のゴミ問題を調べるためにゴミ拾いをした。その結果から「自分たちに出来ること」を討議。ペットボトルのリサイクルというアイデアが出た。こうして、ペットボトルでフラワーポットを作って花を育て（写真1）、校区にある東日本大震災の被災者が住む仮設住宅を訪問してプレゼントする活動へと発展した。

このように、子どもたちは、活動から気付いたことや考えたことを話し合い、自ら新たな課題を見付け、次の活動へと発展させていった。課題には正解はなく、子どもたちは話し合いを通じて、自分たちでゴールのイメージをつくり上げていく。

「自分たちで設定した課題だからこそ、どうすればよいかを考え、調べ、友だちと話し合うという主体的な活動に結びついているのです。『教える教育』ではなく『主体性を育む教育』となっています」（那知上先生）

仮設住宅への訪問が決まり、「どんなフラワーポットにしたらよいか」「どうすれば喜んでもらえるか」など、子どもたちの話し合いは

いっそう活発になった。こうした活動を通し、子どもたちは「皆で協力することで考えを高められる」と実感し、自分の考えを伝えたり、友だちの考えを受け入れたりすることの大切さに気付いていく。

「自分の考えを実現させたいという気持ちが強まると共に、友だちの考えもどうかを考えるようになります。ですから、反対意見を言う際に、理由を伝えて説得する姿が見られるようになってきました」（那知上先生）

図 活動の流れ、および表現とのかかわり

活動内容	表現活動
話し合いをしながら、これからの活動の見通しを持たせる。	子どもから活動してみたいことを発表させる。その理由を説明させる。
自分たちの地域でどのような問題があるかを話し合う。	自分が気付いたことや家庭での聞き取りを基に発表させる。
世界中にもいろいろな問題があることに気付く。	パソコンや本を使って、問題点を発見し発表する。
世界にも自分の住む地域にも共通する「ゴミ問題」に気付く。	グループで「ゴミ調べ」をして発表する
ペットボトルを集め、フラワーポットを作る。	どのようなフラワーポットにすればよいかを話し合う。
留学生と一緒にメッセージづくりをし、プレゼントの準備をする。	どのようなプレゼントにして渡すといいか話し合う。
仮設住宅に花とメッセージを届けに行く。	どのようにすれば仮設住宅の皆さんに喜んでもらえるかを話し合う。
会津大の留学生も招いて、次のプロジェクトについての話し合いをする。プロジェクトの計画をする。	これから私たちは地域のためにどのようなことができるかを話し合う。

*同校の資料を基に編集部で作成

● 取り組みの成果

普段は発言が少ない子どもも表現する機会が多くなった

子ども主体で進む活動のため、当初、教師



写真1 東日本大震災の避難住民に、花を育ててプレゼントする活動の様子。ペットボトルの植木鉢作りでは、住民に喜んでもらおうと、子どもは思い思いに飾り付けをした



写真2 海外の子どもたちの交流サイトに掲載するための動画を撮影

自ら表現したくなる授業づくり

は授業展開をイメージしにくく戸惑うこともあった。今では、教師がある程度の道筋を想定し、子どものアイデアをなるべく生かして進めるようにしている。那知上先生は「活動が異なる方向に進みそうな時も、まずは子どもたちに話し合いをさせています」と言う。

子どもが生き生きと自分を表現する姿を目の当たりにし、教師は子どもの主体性を信じる大切さを実感している。12年度の6学年担任の小川百合子先生はこう話す。

「普段はあまり発言しない子どもも、発言し活動に進んで取り組んでいました。多くの子どもが自由に考えを言うようになって、子どもの考えや思いは一人ひとり違うのだと改めて気付かされました。そうした違いが、活動をいっそう深めていると思います」

また、教務主任の鈴木淳先生は「子どもが自分たちで活動を進めることから得られる発見や感動、そして、未知の世界を体験した時の驚きや気付きはとても大きいものです。外部の人とかかわり、コミュニケーション能力が育まれる良さもあります」と強調する。

ESDと教科学習とのつながりも意識する。特に、表現力の基本として国語は重視している。国語科主任の加藤久子先生は話す。

「話す、書くの基本を身に付けているからこそ、子どもは自信を持って表現できます。国語の授業では、自分で課題を見付け、誰に何を伝えるかという目的をはっきりさせてか

ら、話したり書いたりするようにし、表現力を鍛えています」

同校では、アメリカのフロリダ州にある小学校と「Going Global」(SNSによる国際交流プロジェクトへ*)に参加し、メッセージや写真のやり取りを行っている。ここでは、日本語で書き込むと自動的に英語に翻訳され、英語での書き込みは日本語で見られる。子どもたちは言語の壁を感じずに、日本とフロリダの気候の違い、給食や行事など、お互いの学校の様子について意欲的に交流している。また、「四季プロジェクト」では、パキスタンやアメリカにある学校と、地域の四季の様子を互いに紹介し合い、その違いに驚いていたと言う(写真2)。

「外国の文化や事情に関心を持つと共に、異なる文化の人々と交流する方法が身に付くと期待しています」(那知上先生)

今後は、ESDやSNSの取り組みを更に推し進めていく考えだ。

「最初から大きなプロジェクトを展開しようと思ってもなかなかうまくいきません。急がずスモールステップを積み重ねることで、徐々に活動を広げていく考えです」(那知上先生)

「自校で出来ることには限りがあり、外部との連携によって教育活動はより充実します。会津大をはじめ、関係機関との連携の強化を図っていききたいと思います」(石綿校長)

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

当然のことながら、学校経営は校長1人では出来ません。先生方の意見を吸い上げ、協力して活動を進められるようにし、先生方が更に指導力を高められるように研修に積極的に参加するように伝えていきます。

教育は長い時間が掛かるもので、特効薬はありません。「和をもって尊しとなす」を胸に、皆が協調し合える環境をつくり、子どもが「ここで学んで良かった」と思える学校を目指しています。

校長 石綿吉男先生

ミドルリーダーの役割

校長や教頭と先生方との橋渡し役になり、仕事をしやすい環境や組織をつくるのが、教務主任としての大切な役割だと考えています。若手やベテランにかかわらず、気兼ねなく意見を交わし合える雰囲気をつくることも大切にしています。

場合によっては、どこまで自分の意見を出してよいのかと迷うこともあります。「こうした方が良い」と思うことは積極的に話すよう心掛けています。

教務主任 鈴木淳先生

考える力は表現によって深まり、 表現し合うことで思考が共有される

白梅学園大学院子ども学研究科長 無藤 隆

表現力は、思考力、判断力とはどのような関係にあるのか。そして、こうした力を育むために、これからの子どもたちに求められる指導のあり方とは何か。白梅学園大学院子ども学研究科長の無藤隆教授にポイントを解説してもらった。

● 表現力をどう考えるか

思考力、判断力、表現力は らせん的に高まる関係

表現力を育成するポイントを考えるに当たり、まず新課程で思考力、判断力、表現力が強調されている意図を改めて確認してみましょう。これらの力は、新しくつくられた概念ではありません。従来から、基礎的・基本的な知識及び技能とあわせて指導すべき力と考えられていました。それが、新課程では思考力、判断力、表現力が3つのプロセスであり、らせん的に高まる関係にあると捉えられていることが重要です。

思考は、言葉をはじめとしたさまざまな表

現手段を用いながら深めていくものです。考えるとは、ある意味では対話することです。対話の相手は他人だけでなく、自分の場合もあります。誰かと対話するのなら適切に表現しなければ伝わりませんし、1人で考える時は考えを言葉にするなど整理することが思考を深める助けになります。また、表現が重視される別の理由として、表現したことは目に見えるため、具体的な指導や評価によって思考を深めやすいことが挙げられます。

このように考えると、思考力、判断力、表現力を切り分けても、あまり意味がないことが分かります。これらは、一連のプロセスとしてセットで高めるべき力と捉えていただきたいと思います。

図1 言語力を3段階で考える

- ① 自然言語、日常言語
- ② 教科固有の言語
- ③ 記号表現、パフォーマンス

算数の場合

- ① 「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできたら、何羽になった？」
- ② 「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできた。それらを『足す』と『合計』で何羽？」
- ③ 「 $3+2=5$ 」

音楽の場合

- ① 「モーツァルトの曲がきれい、明るい」
- ② 「曲のテーマが……、リズムが……」といった音楽的な用語や、楽譜などで表現する
- ③ 実際に所定のねらいを持って部分を演奏してみる

*無藤先生への取材を基に編集部で作成

PISAなどの調査で読解力の重要性が指摘されていることから、新課程では言語力の育成も強調されています。言語力と、思考力、判断力、表現力は、密接にかかわっています。

自ら表現したくなる授業づくり



むとう・たかし◎お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授などを経て現職。専門は発達心理学、教育心理学。第6期中央教育審議会委員、同初等中等教育分科会教育課程部会長などを務める。著書に「現場と学問のふれあうところ―教育実践の現場から立ち上がる心理学―（新曜社）など。

言語力は、3段階に分けると考えやすくなります。①自然言語、日常言語、②教科固有の言語、そして③記号表現、パフォーマンスです（図1）。これらは幅がありますが、全て言語です。それぞれ具体的に説明しましょう。算数であれば、①は「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできたら、何羽になった？」といった表現です。これは日常的に用いられる言葉と同じです。②は「ハトが3羽いたところに2羽が飛んできた。それらを『足す』と『合計』で何羽？」と、算数的な言語を使います。そして③は「 $3+2=5$ 」というように数式や記号などで表します。

豊かな表現とは、①③の表現を相互に翻訳して使いこなせることだと考えます。音楽を聴いて、「なんだかいいな」という表現しか出来なければ、①しか使えないことになり「このリズムやメロディーがいい」といった音楽的な言葉を用いたり、もっと専門的に楽譜で表せたりする方が、より具体的に伝わる表現と言えるでしょう。考えや思いを込めて、特定のパートを演奏できれば、それは思考し表現する営み自体です。

●表現力を高める指導①

思いを表す言葉を適切なタイミングで与える

次に、表現力を高めるための指導についてお話しします。表現することは面倒なことともいえます。本を読んでも、普通は「面白かった」といった感想で終わらせてしまいます。何が面白かったのかを分析的に表現させるためには、指導の工夫が必要です。従来の授業では、友だちの前で発表するような表現活動はありましたが、個々の思いをきめ細かく表す学習はあまり行われていなかったように思います。一方で、教育現場には、表現させたいと考えるあまり、「ただ話せばよい」という誤解があるように思えます。こうした誤解は、表現を目的化してしまう危険性があります。

例えば、音楽や体育の授業でも言葉で伝え合う場面が多く見られるようになりました。確かに大切な学習活動だと思えますが、音楽や体育の教科の目的は、演奏や運動の質を高めることにあります。そのためには、思い付いたことを話すだけの活動ではなく、先生が子どもの表現を分析して、「悲しい感じがしたんだね。それなら悲しさを出すように歌ってごらん」などと具体的な言葉を与える必要があります。これは国語や算数などの教科でも同じことです。

授業では、「表現したい」という思いを育てることも心掛けると思います。そのような思いを生み出すのは、主に体験活動です。例えば、物語を読んで思いを馳せたり、音楽を聴いて感じたり、理科の実験で気付いたりすることで、子どもの感覚や感性は磨かれます。それは、すぐに言葉で表す必

要はありません。例えば、音楽を鑑賞した後、多弁に感想を話すことだけが表現ではありません。しみじみと感動に浸ったり、思わず拍手をしたりすることも表現の一部です。型通りの表現をさせるより、口ごもっても「どう表現すれば伝わるか」と考えさせることが表現の出発点です。

そうした思いが見られたら、それを見直して再吟味するように促しましょう。作文に書くのであれば、「楽しかった」という表現から進み、誰に何を伝えるのかといったねらいや目的に照らして推敲させます。プレゼンテーションであれば、聞く人が分かりやすい内容や伝え方であるかをよく考えさせます。ここでは急かさないことが大切ですが、言葉に出来ずに終わるのもよくありません。教師は、思いや考えを表す言葉を適切なタイミングで与えるバランスを大切にしてください。

●表現力を高める指導②

体験と言葉の距離を意識し 発達段階に応じた指導を

系統的に表現力を高めるために、指導では低・中・高学年の段階を意識するとより効果的です(図2)。低学年は体験などから思いを育て表現につながることを大切にします。体験を言葉や文章にする指導などが中心です。中学年は単に語るだけではなく、語り方や絵、記号など表現の語いを増やします。そし

図2 発達段階に合わせた指導を



*無藤先生への取材を基に編集部で作成

て、高学年は表現を見直して再吟味させる時期といえます。例えば、「総合的な学習の時間」に市長に提出する提案書を模擬的に考える場合、明確な根拠を示すことや、内容が伝わりやすい表現を工夫します。

低学年では、幼児期の育ちも意識するとよいと思います。幼児期は体験を通した気付きをその場で表現することを大切にします。体験と言葉が近い状態です。低学年の生活科は、幼児期の体験活動に近いと言えますが、異なるのは体験による気付きを持ち帰り、整理して発表することです。体験と言葉の距離が少しずつ離れていくのです。高学年になると、体験がなくても共感する力や想像力で補って表現できるようになります。また、小説や詩、俳句・論説など、ジャンルによる特性を踏まえ、表現を考えられるようになります。一人ひとりの表現力を高める指導は、一斉指導の中でも工夫して取り入れることが出来

ます。ある子どもが算数の証明問題の発表をしたら、他の子どもに異なる説明をさせるとよいでしょう。また、跳び箱に成功した子どもに跳べた理由を動作と共に発表してもらい共有することも表現活動といえます。モデルとなる子どもが語ることによって、「そういう考え方があるのか」と、教室の中に思考や表現が広がっていきます。

学び合いも有効な表現活動となります。ペアやグループで、「自分はこういう理由でこう考えた」「なるほど。私は……」といった関係をつくっていきます。学び合いをより深めるためには、補助として子どもが共有する機会を与えることも大切です。代表的なのは板書です。日本の教師の板書技術は誇るべきもので、子どもの発言を写すのではなく、整理してまとめていく技術に優れています。そのような板書が媒介となり、子どもの考えをつなぎます。今後、先生方がより意識的に板書を活用することで、表現活動は促されるでしょう。子どもが共有する表現は、教師が与えるだけではありません。例えば、グループごとにホワイトボードを与え、子どもが考えを書きながら学び合うという方法も有効です。また、同時に、評価の仕方を見直す必要もあるでしょう。実践が広まりつつありますが、思考や表現を評価するには、習得した知識を使いこなせているかを見るパフォーマンス評価が適していると考えます。子どもの作品を

自ら表現したくなる授業づくり

並べ、「〇年生はこれくらいまで出来るという」といった具体的な評価規準を示せば、教師の目線も合ってくるでしょう。

●保護者との連携

家庭でも中身のある語らいを促す働き掛けを

表現力は学校だけではなく、家庭でも育つものです。保護者には、子どもの話をよく聞き、分かりにくいことは言い換えてあげるように働き掛けるとよいと思います。「なるほど」「そうなんだ」といった相づちと共に話を受け入れる、共感的な関係が土台になります。そして、表現力を育むために、より詳しく説明させるなど、保護者との間でも中身のあるやりとりをしてもらいたいところです。

学校が家庭での語らいを促す課題を設定するのもよいでしょう。低学年では教科書の音読を保護者が聞いて記入表にチェックすることや、生活科で保護者の子ども時代をインタビューする活動などが考えられます。また、地域住民に話を聞くといった課題を取り入れると、普段はあまり接点がない異質な人とのかわりを持たせることも出来ます。

●管理職の先生への期待と今後の展望

グローバル社会の進展を見据えて根気よく自分を表現させる

表現力という観点から授業改善を進めるに

当たり、まず、考える力は表現によって深まる、また、互いに表現し合う活動によって皆の思考として共有されるという共通認識を、校内に広げることから始めるとよいと思います。

そして、「課題が解ければよい」のではなく、「どう解いたのか」「その解き方が適切なのか」といったことを自覚的に語らせる方向を大切にしながら授業づくりを進めてください。そのような過程を通して思考力も高まるのです。同時に、ホワイトボードやICT機器といった子どもの考えをつなぐための環境の整備も進めるとよいでしょう。全体で行っていた表現活動を、ペアやグループなどに分散させていくイメージを持ってください。

表現力は、これからの社会を生きていくために、更に重要になるでしょう。グローバル化が進むにつれて異質な相手と関係を築く必要性が高まるからです。そのためには、自分の思考について、相手の背景を踏まえて自覚的に話すなど、より高い表現力が求められます。いわゆるクリティカル・シンキング（批判的思考）の力も必要になるでしょう。

しかし、現代日本では少子化が進んで子ども同士の付き合いが減ると共に、同質の集まりが中心になりつつあります。それにより同じグループの中で相手の気持ちをよくみ取るなどの力は高まります。絵文字の発達などがそれをよく表しています。半面、異質な相手に

自分の考えを伝えることは苦手です。

例えば、SNSや携帯電話などによるコミュニケーションは世界を広げるように見えますが、実のところ、自分に共感してくれる相手としか付き合えないという状況になりがちです。こうしてますます自分の考えを丁寧に説明する必要がなくなります。

このような社会状況だからこそ、学校教育では、異質な人とのかわり、根気強く自分を表現する場を増やすことがますます必要になるのです。

表現の工夫を要に据えることで、表現力と共に、思考力や判断力を高める授業がつけられていくことを期待しています。

特集取材を終えて

新課程で大切なポイントとなっている「思考力、判断力、表現力」。今回の特集では、特に目に見えやすい「表現」に着目することで、思考との関係や、より具体的な実践のヒントを得られるのではないかと考えました。取材を終えて、改めて、思考することと表現することは一体的な関係であること、そして「言いたい」「伝えたい」と「思わず表現したくなる」授業づくりをすることが大切なのだと感じました。

決められた「型」を与えるだけでなく、ただ子どもに任せただけでもなく、方向性を示しながら子どもの表現したい気持ちを育む授業のあり方とは——共に考え続けていきたいと思えます。

VIEW21 小学版編集長 杉田美穂

栃木県鹿沼市立みなみ小学校

鹿沼市立みなみ小学校では、月水金の朝、始業までの15分間を「パワーアップタイム」とし、国語や算数の基礎の定着を図るための自主学習に充てている。この日、読み書き・計算の基本に課題がある子どもも約40人は、図書室や空き教室に集まり、教職員の支援を受けながら課題に取り組んでいた(写真)。その内容は、一人ひとりで全く異なる。携帯型ゲーム機で漢字の書き順を学

ぶ子ども。今日の授業で扱う教科書の該当ページをデイジー(*)で聞きながら読む子ども。パソコン画面に表示された迷路の中を点滅する光を追っていたり、プリントにある2つの点を鉛筆で結んだり、視覚認知や筆圧の訓練をしている子どももいる。教職員は、その様子を確認しながら、「よく出来たね」「もう一度考えてごらん」などと声を掛ける。丸をもらうたびにうれし

そうに、すぐに次の課題に取り組む子どもたち。始業のチャイムが鳴ると、満足そうな顔をして自分の教室に戻っていった。

ICTの活用で学びにくさを排除

「泳げない人にいくら『頑張れ』と言っても、浮き輪を投げ、泳ぎ方を教えないと溺れてしまう。学習も同じで、学べるように援助し、つまづきの原因を探って学び方を教えることが必要です」(原田浩司校長)

同校では、原田校長が5年前に着任して以来、子どもの個々の課題に応じた指導を目指し、多様な学びの場の整備や、指導法・教材の開発に積極的に取り組んできた。

個の課題と特性に応じた指導をICTで実現

2011年4月、文部科学省が公表した「教育の情報化ビジョン」では、

2020年度に向けて実施する施策の1つに子ども1人1台の情報端末による教育を本格展開させることの検討を挙げた。

一斉指導が中心の学校教育において

ICTでどのような指導が可能となるのか。

個別支援にICTを活用する事例を通して考える。

School Data



栃木県鹿沼市立みなみ小学校

◎ 1981(昭和56)年開校。心構えをつくる指導として、授業の始まりと終わりなどに「立腰タイム」を設け、正しい姿勢で黙想を行う。

校長 原田浩司先生 / 児童数 216人 / 学級数 11学級(うち特別支援学級5) / 所在地

〒322-0531 栃木県鹿沼市南上野町503 /

TEL 0289-75-4021 / URL <http://www.school.kanuma.ed.jp/e-minami/>

*学校見学は随時受け付けています

導主任の荒川一志先生、竹之内崇先生を中心に次年度の支援計画を立てる。「漢字が苦手な子どもは視覚的に課題があったり、教師の説明が理解できないのはワーキングメモリーが低いためであったりします。学習を阻害する根本を探し出し、手立てを講じています」と荒川先生は話す。

支援ではプリント以外にパソコンや携帯型ゲーム機を活用する。子どもはゲームで遊んで育った世代であり、図や動画から直

* Digital Accessible Information SYstemの頭文字で「DAISY」。パソコンの画面上の文章を読み上げられるソフト。文節のまとまりに色が付くため、どこを読んでいるかが分かり、音声をまねて読む練習も出来る



鹿沼市立みなみ小学校校長

原田浩司

はらだ・こうじ 「担任の見取りと共に、私も子どもを観察して課題を把握し、支援の方向性を示すことを大切にしている」



鹿沼市立みなみ小学校

荒川一志

あらかわ・かずし 児童指導主任。「先生方との対話を大切にし、子どもの多様な面を共有するよう心掛ける」



鹿沼市立みなみ小学校

竹之内崇

たけのうち・たかし 特別支援教育コーディネーター。「子どもの言動には必ず理由がある。そこを掘り下げ、個々に合う指導をしていきたい」



写真 パワーアップタイムで子どもは自分の課題に応じた学習に取り組む。「支援が遅れば、それだけ課題が積み重なります。早期の支援を心掛け、良いと思われる方法を試します。もし成果がなければ、別の支援の方策を考えればよいのですから」(荒川先生)

感的に考え、理解することが得意だからだ。「子どもの興味を引きやすいデジタル教材は学習の取り掛かりに適していますし、課題に応じて作り替えがしやすいという利点があります。自力でデジタル教材を作るのは大変なので、インターネットでフリーソフトを探したり、市販のソフトを活用したりしています」(荒川先生)

ICTには、学びを阻害する環境を排除し、学習に集中させる効果もあるという。「筆圧が弱くても、タッチペンなら字を認識してくれますし、読むのが苦手でも、音読機能を使えば問題内容を聞いて理解できます。正誤もすぐに分かるので、学習がスピーディーに進み、たくさん正解したという達成感が、子どもを次の学習へと進ませ

ます。こうして自信を持つと、教科書とノートでの学習に戻っても自ら学んでいけるのです」と竹之内先生は説明する。

みんなが安心して学べる環境を整える

個別支援を進める基盤として学級づくりにも力を入れる。原田校長はこう強調する。

「個別支援は通常学級とは別の教室で行いますが、それについて差別的な発言があると、子どもは安心して学べません。他人を傷付ける行為は絶対に許さないと、私たちは毅然とした態度で臨んでいます。担任が指導しても改善しないなら児童指導主任が、それでもだめなら私が対応しています」

聞く態度も徹底的に育てる。自分の言葉を受け入れてもらえると感じることで、子どもは安心して発言できるからだ。例えば、教師の話をささぎって話そうとする子どもがいたら「今、先生が話しているよ。あなたの言いたいことは後で聞くね」と諭す。

こうした指導を粘り強く続けた結果、子どもは個別支援を特別視しなくなった。個別支援を受けた子どもが自信を付けて教室に戻り、学習に取り組む姿を見て、自ら支援を受けたいと申し出る子どもも現れた。教室に温かい雰囲気生まれ、学校では全く話せなかったのに朝の1分間スピーチを出来るようになった子どももいるという。「ある自閉症の子は書くことにこだわり

があり、ノートに書いては消しを繰り返して、学習が進まない状況にありました。そこで、パソコンでノートを取るようにしたところ、書く必要がなくなり、学習がスムーズに進むようになったのです。学力が上がれば、自信が付き、行事は通常学級と一緒に出来るようにもなりました。今は中学校でみんなと一緒に頑張っていると聞き、本当にうれしく思っています」(竹之内先生)

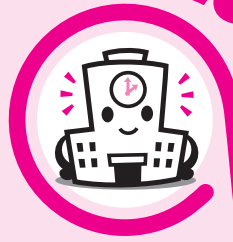
原田校長の着任時、問題行動に悩まされていた同校だが、今はそれも落ち着き、規律ある行動が見られるようになった。ICTが教育で担う役割は何か。そのヒントがみなみ小学校の取り組みにありそうだ。

これからの教育に生かせる視点

◎ 認知的な特性で課題をもつ子どもにとって全員一律の教材では理解が進まないばかりか、かえって学習が嫌になってしまいます。みなみ小学校ではICTを使い、視覚や聴覚を使った学び、ゲーム感覚の学びなど、一人ひとりの特性や能力に適した学びが集中できる環境で実践されてきました。コンテンツや技術が更に発展すると、先生の主たる役割が子どもの状況に応じて力を伸ばすこと、「支援」となる可能性を強く感じました。

ベネッセ教育総合研究所グローバル教育研究室
主任研究員 中垣眞紀

つながる



学校と家庭の学び

6年間の記録「マイカード」で 子どもの夢や希望を育む

北海道美瑛町立美瑛東小学校

美瑛町立美瑛東小学校では、目標を持ち、その実現に向けて努力し続ける子どもを育てようと、1年生からキャリア教育を行っている。従来の教育活動をキャリア教育の視点で再構築し、子どもが自分の成長を感じられる「マイノート」に取り組むことで、将来に目を向ける子どもが増えているという。

子どもが達成感を得られるよう
学期ごとの目標と成果を蓄積

美瑛町立美瑛東小学校は2011年度、キャリア教育に力を入れ始めた。その目的を、古木勉三校長は次のように説明する。

「小学校のキャリア教育が目指すのは、他者への思いやり、自分の役割に対する責任感など、社会で求められる力の育成です。更に、子どもが将来に夢や希望を抱くようになることも目標の1つだと、私は考えています。実現に向けて努力する楽し

さを知ってほしいと思い、活動を工夫しています」

キャリア教育に取り組むにあたり、従来の教育活動の見直しを行った。学年ごとの教育活動を、文部科学省がキャリア教育で育む基礎的・汎用的能力として掲げる「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に当てはめ、再構築したのだ(図1)。そのねらいを、倉博之教頭は次のように話す。

「キャリア教育の基礎的・汎用的能力は、教科指導を含めた全ての教

育活動で育むべき能力だと思っています。

それらを整理し可視化することで、各教育活動が子ども将来にどのようにつながるかを考えて指導するということに、先生方の意識が変化していくことを期待しています」

同校の取り組みの柱は、活動の記録となる「マイノート」だ。全ての子どもにファイルを1冊ずつ配布し、次の3種類のカードをとじることでつくり上げていく。

1つめは「目標カード」(P.30図2)。「がんばりたいこと」「将来の夢」などを各学期の初めに書く。

2つめは、「ふりかえりカード」。学年ごとに決めた教育活動について、目標や反省点、感想などを書く。

3つめは「自己評価カード」(P.30図3)。学期末に「目標カード」や「ふりかえりカード」を見ながら、学期内の自分の行動を4段階で評価し、自覚している自分の変化を書く。各カードは子どもの発達段階に応じて内容が進化する。低学年では学校生活への適応や自己を知ることが中心だが、中学年では友だちとのかわり、高学年では集団の中での自己の役割と責任などの視点に加わる

という具合だ。

「マイノート」は卒業まで使い、6年分のカードを蓄積する。その意義について、4学年担任でキャリア教育推進担当の吉川克幸先生は話す。

「『マイノート』を見ると、これまでに自分がどのような目標を立て、その実現に向けて何をしてきたかが一目で分かります。子どもが自分の成長を感じられれば、更に高い目標を抱き、実現するために努力を続けるようになるでしょう。目標を達成できていなくても、自分で立てた目標ですから、何がいけないのかを確かめ、『もっと頑張ろう』と思うはずです。子どもの気持ちを前向きにしてくれるノートだと考えています」

「マイノート」は北海道教育委員会上川教育局が進める取り組みだが、同校は子どもが書きやすいように、アレンジを加えた。例えば、「どう書いたらよいか分からない」という子どもが多かった「自己評価カード」は、負担を減らそうと記述欄を少なくし、評価項目の文言を子どもに分かりやすい表現に改めた。

また、2つ以上の教育活動について書くことが奨励されている「ふりかえりカード」も、いくつにするか

は担任に任せ、運動会や学芸会などの行事を振り返ることを勧めた。

「行事は子どもにとって楽しい活動であり、目標を立てることや達成することに真剣になるため、有意義な振り返りが出来ます。また、我々教師にとっても、キャリア教育の意義を理解する取り掛かりとして適していると思います」（吉川先生）

家庭との連携を強め 取り組みを更に充実させたい

キャリア教育を始めて3年目に入り、将来に目を向ける子どもが増えてきた。13年度の文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、6年生のほぼ全員が「将来の夢や希望がある」と回答したという。

北海道美瑛町立美瑛東小学校

◎1971（昭和46）年開校。北海道中央部の田園地帯に位置する。2011年度、北海道教育委員会から「マイノート」開発協力校に指定されて以来、キャリア教育に力を入れている。また、家庭で何を学習すればよいかを発達段階に応じて具体的に示した「家庭学習のしおり」を子ども全員に配布するなど、家庭学習の習慣化を目指した取り組みも盛んである。

校長 古木勉三先生
児童数 147人
学級数 12学級（うち特別支援学級6）
所在地 〒071-0201
北海道上川郡美瑛町丸山2-8-15
TEL 0166-92-1205
URL なし



美瑛町立美瑛東小学校校長

古木勉三

ふるき・べんぞう

「子ども一人ひとりをしっかり見取り、秘められた可能性を引き出したい」



美瑛町立美瑛東小学校教頭

倉 博之

くら・ひろゆき

「子どもとも保護者とも先生方とも、誠実に向き合っていきたい」



美瑛町立美瑛東小学校

吉川克幸

よしかわ・かつゆき

4学年担任、キャリア教育推進。「褒める時も叱る時も全力を尽くしたい」



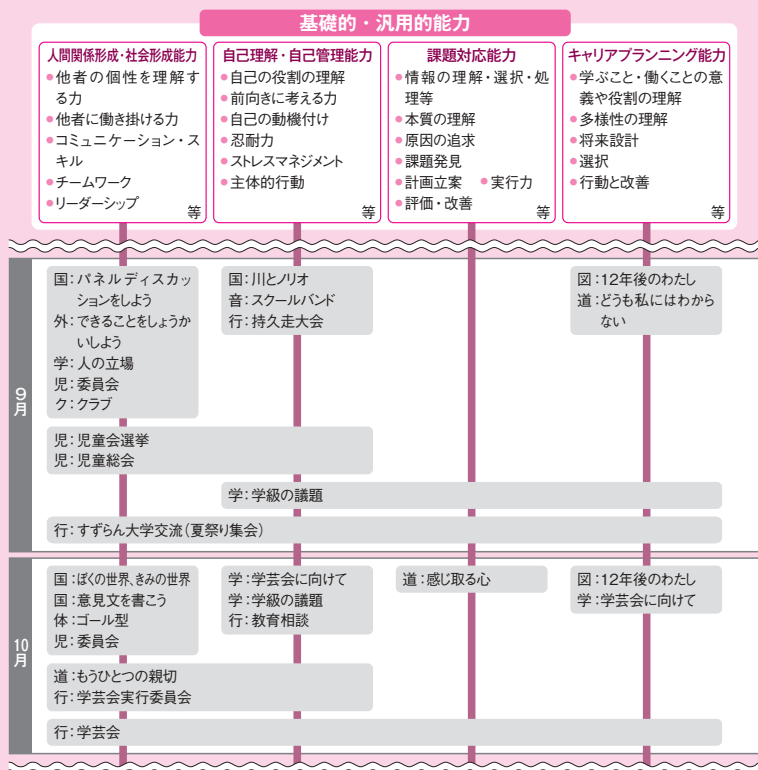
美瑛町立美瑛東小学校

二階堂めぐみ

にかいどう・めぐみ

教務主任。「教師が元気に明るく接すれば、子どもは心からの笑顔を返してくれる」

図1 キャリア教育年間計画表（6年生）



4つの基礎的・汎用的能力をどの教育活動で伸ばせるかを抽出し、学年ごとに一覧化。「国」は国語、「学」は学級活動、「行」は行事というように、教育活動の種類を略称で表している
*同校の資料を基に編集部で作成

図3 自己評価カード(中学年用)

キャリア教育アンケート(中学年用)		年 齢			
★ 今学期の生活を振り返って、当てはまる番号(1-5)を書いてください。		当てはまる		当てはまる	
質問		1	2	3	4
ア	① 友達や学校の先生、保護者の話を聞く時、その人の考えや気持ちからわかるようにしていますか。	4	3	2	1
	② 相手のわかりやすいよう、上手に、自分の考えや気持ちを伝えるようにしていますか。	4	3	2	1
	③ 自分から仕事を任ぜられたり、友達と協力して行動したりしていますか。	4	3	2	1
イ	④ 自分の好きなことや面白いこと、よいところや得意なことをよく知っていますか。	4	3	2	1
	⑤ 困っている時ややりやめる気がしない時でも、自分がしなくてはならないことをがんばっていますか。	4	3	2	1
	⑥ 少しづつ苦手なことでも、自分から進んで取り組めますか。	4	3	2	1
ウ	⑦ わからぬこととして	★ 1・2学期に自分の事にマイノートを付けて、自分の気持ちや行動に気づきがあります。			
	⑧ 何かの事やことについて	わすれものでもおぼろしくなく、覚えておくようにしています。			
	⑨ 何かの事やことについて	★ 隣の学年でがんばりたいことは何ですか。			
エ	⑩ 頑張る	★ 1・2学期に自分の事にマイノートを付けて、自分の気持ちや行動に気づきがあります。			
	⑪ 「大変な	★ 隣の学年でがんばりたいことは何ですか。			
	⑫ 自分	★ 1・2学期に自分の事にマイノートを付けて、自分の気持ちや行動に気づきがあります。			

評価欄は、4つの基礎的・汎用的能力を細分化した12項目について、自己評価を4段階で書く。記入欄は、1・2学期は次学期で頑張りたいこと、3学期は1年間の振り返りと次の学年で頑張りたいことを書く

*同校の資料をそのまま掲載

図2 目標カード(中学年用)

年 級	名 前	年 月 日
【3学期】		
★ 3学期にがんばりたいことや将来の夢について、それぞれ書いてみましょう。		
① 友達と協力して取り組むこと！ 一つのことではけんかやあきらめをしないこと、 自分自身でつなぐことをがんばることに。		
② 当番活動や委員会活動でがんばりたいこと！ その時はまずはお金を集めること、 自分の得意なお手伝いをする。		
③ 興味のある仕事や将来の夢！ 将来の夢はケーキ屋さんになること。		
3学期 努力したいこと！最後まで習った勉強を わすれないように、よく勉強する。		
2学期に書いたことを振り返ってから書きましょう。		

記述内容は発達段階により異なり、例えば「友だちと協力して取り組みたいこと」は、低学年では「がっこうせいかつのなかでがんばりたいこと」、高学年では「学級の仕事や委員会活動で挑戦したいこと」となる

*同校の資料をイラストを削除して掲載

将来に対する子どもの関心を更に高めるために、保護者への情報発信にも力を入れる。12年度には、ロケットを開発する地元企業の経営者の講演会を授業参観日に行い、努力することの素晴らしさを保護者にも聞いてもらった。また、古木校長が年度初めに保護者総会で夢を持つことの大切さを話したり、学校だよりで子どものなりたいたい職業と理由を紹介したりして、保護者からの働き掛けも呼び掛けている。このように家庭との連携を強めていくことで、取り組みを充実させていきたいと、教務主任の二階堂めぐみ先生は話す。

「子どもにとって最も身近な社会人である保護者と、夢や希望について話すことで、子どもは自分の将来に更に目を向けるようになるはずだ。『目標に向かって頑張ろう』という気持ちも高まると思います」

古木校長は、今後について次のように話す。

「本校のキャリア教育は始まったばかりです。先生方も保護者とも密接なコミュニケーションを図り、一丸となって、子どもたちが夢や希望を持てる環境を整えていきたいと思っています」

キャリア教育や、学習法をサポートする 6年生向けの副教材を無料でご提供します

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2012年度は、のべ約15,000校から約160万冊ものお申し込みをいただきました。

2013年度は、6年生の児童向けに、キャリア教育の授業で自分の将来について考え、中学以降につながる「学ぶ意欲」と「自分でできる自信」を育むサポートをします。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。ただ今、事前予約を受付中です。詳しくはホームページまたは本誌同送のチラシをご覧ください。

学校&家庭 学び応援プロジェクト ホームページ <http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

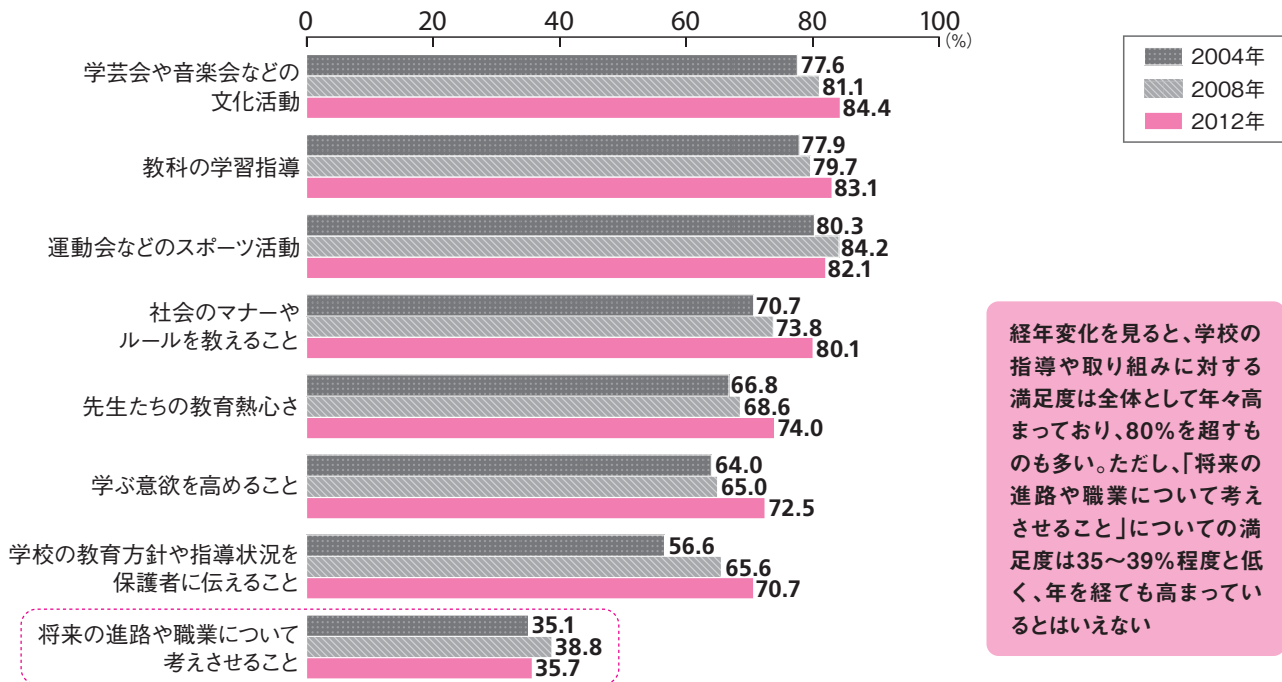
未来に進むちからを育むプロジェクト。
ベネッセの学び応援

締め切り
2013年
12/20
金



保護者のキャリア教育に対する満足度は高くない

学校の指導や取り組みに対する満足度 (回答: 全国の公立の小学2年生、小学5年生の子どもをもつ保護者)



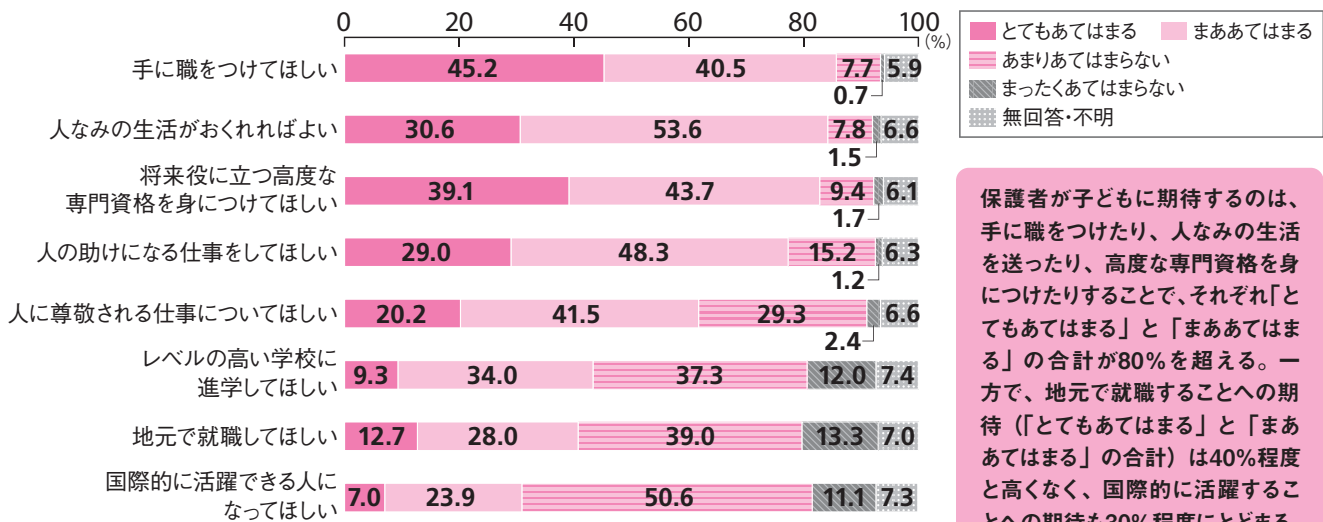
経年変化を見ると、学校の指導や取り組みに対する満足度は全体として年々高まっており、80%を超えるものも多い。ただし、「将来の進路や職業について考えさせること」についての満足度は35~39%程度と低く、年を経ても高まっているとはいえない

注1) 数値は「とても満足している」と「まあ満足している」の合計

注2) 経年比較が可能な11項目中、一部を抜粋して紹介

保護者の子どもへの期待は手に職をつけること

子どもの将来に期待すること (回答: 全国の公立の小学2年生、小学5年生の子どもをもつ保護者)



保護者が子どもに期待するのは、手に職をつけたり、人なみの生活を送ったり、高度な専門資格を身につけたりすることで、それぞれ「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計が80%を超える。一方で、地元で就職することへの期待（「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計）は40%程度と高くなく、国際的に活躍することへの期待も30%程度にとどまる

注1) 数値は2012年調査

注2) 11項目中、一部を抜粋して紹介

出典: ベネッセ教育総合研究所「学校教育に対する保護者の意識調査2012」(2013)

調査時期は、2004年調査は2003年12月~2004年1月、2008年調査は2008年3月、2012年調査は2012年11月~2013年1月、調査対象は、2004年調査は全国の公立の小学2年生・小学5年生の子どもをもつ保護者4,106人、2008年調査は全国の公立の小学2年生・小学5年生の子どもをもつ保護者3,348人、2012年調査は全国の公立の小学2年生・小学5年生の子どもをもつ保護者3,938人、調査方法は学校通しによる家庭での自記式質問紙調査



上記の関連データはコチラ!

<http://berd.benesse.jp/>

*「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

2013 Vol.1特集「授業で高める自己肯定感」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」小学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト(<http://berd.benesse.jp>)でご覧いただけます。

◎本校でも、子どもの自己肯定感を育むことが最優先課題です。褒めて伸ばすことは大切ですが、「褒める内容」について、教師がどう支援してきたか、子どもをどう理解しているかを前提とすべきだと思います。特集を通して、改めて、子どもの達成感や意欲を支援する教師のあり方が大切だと実感しました。 [静岡県／T小学校]

◎子どもの変化を教師間で共有することで共通理解が深まります。自己肯定感の育成は、学校全体で取り組むことが大事だと思います。そのために、校内研修計画に位置付け、校内での情報共有を図っています。更に、昼休みや放課後などの会話で、担任が気付いていないところや他の教職員の気づきを伝え、子どもの自己肯定感を高めるようにしています。 [徳島県／N小学校]

◎日本の子どもの自己肯定感は本当に低いのでしょうか。日本人はとてと遠慮がちな奥ゆかしい国民性があり、単純に他国と比較できないのではないのでしょうか。自己肯定感とは授業では、グループ学習の係や役割の中で、友だちに褒められたり、必要とされることに気付いたりすることで育ちます。その集団がクラス→学年→学校へと広がると、更に育つと思います。 [長野県／S小学校]

◎自己肯定感を高めるためには、自分の力で学習できたという体験が大切です。板橋区立板橋第一小学校の自由進度学習は、子どもの主体性を育む上で興味を持ちました。また、子ども・教師共に成果が出ていることを考えると、ぜひ実践してみたいと思います。ただ、今までの本校の実践とはかけ離れているため、校長の強いリーダーシップが必要だと感じました。 [東京都／T小学校]

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の橋村伸爾校長が言われた「学校を取り巻く環境はさまざまに変化していますが、子どもを軸に考えれば指導がぶれることはありません」という言葉に勇気と自信をもらいました。そして、「教師が自分の思いを発揮できるよう、見守り、また支えていきたいと思います」という最後の言葉に共感し、私も同僚の先生方に同じように接していきたいと思いました。 [栃木県／N小学校]

◎港区立東町小学校は国際色豊かな学校であり、充実した国際理解教育が推進されていると思います。近い将来、このような学校が増えてくることは容易に想像できます。実態に応じた取り組みが大切ですが、今後を見据えた教育の大切さを認識させられました。 [鹿児島県／K小学校]

読者モニター募集のご案内

『VIEW21』小学版では、企画や誌面づくりのFAXアンケートにご協力いただける先生を募集しています。今年度、小学校にご勤務されている先生に、年5回程度のFAXアンケートをお願いする予定です。次回からのご回答謝礼として、1回につき500円の図書カードと本誌1冊を、小学校のご住所宛てに送付・進呈いたします。ぜひご応募ください。

◎応募方法〈締め切り：8月30日(金) 受信分まで〉

下記の①～⑤をA4用紙1枚(書式自由)にご記入の上、FAX 0120-959-887(送信料無料)にお送りください。

①ご勤務先の小学校の郵便番号、住所 ②学校名(漢字、フリガナ)
③お名前(漢字、フリガナ) ④役職[1:校長 2:副校長 3:教頭
4:教務主任 5:学年主任 6:研究主任 7:一般教諭(担任あり)
8:一般教諭(専科) 9:その他] ⑤担任をお持ちの場合の学年

*2013年11月中旬予定のアンケートの発送をもって結果のお知らせいたします。
(応募多数につき、お願いできない場合は9月下旬頃に封書にてご連絡いたします)

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

今号から「ベネッセ教育総合研究所」から『VIEW21』を刊行する運びとなりました。今まで同様、学校現場が抱える切実な課題に向き合い、先生方と共に解決策を考えていくという編集方針は変えません。それに加えて、これからの社会を小学生が生き抜いていくために、どのような力や姿勢が必要なのかを探り、発信してまいります。今後ともご指導のほどよろしく申し上げます。

ベネッセ教育総合研究所 情報編集室室長 小泉和義

VIEW21 小学版 2013 Vol.2

2013年8月12日発行／通巻第37号

発行人 岡田晴奈
編集人 谷山和成
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所

印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 二宮良太
撮影協力 荒川潤、川上一生
イラスト協力 幸剛

◎お問い合わせ先

情報編集室
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3390

色とりどりの学びの情景

食で育む豊かな心



表紙の学校 新潟県燕市立分水小学校



「おやつ」をテーマにした1年生の食育の授業では、清涼飲料水にどれくらい砂糖が入っているかを実験。砂糖のあまりの多さに子どもたちから驚きの声上がる



初めての「弁当の日」。友だち同士弁当を見せ合う。前日の家庭科の授業で習った卵焼きを早速作った子どももいた。先生も自分の手作り弁当

中庭では各学年がトマトやなすなどを栽培。夏休みに保護者と収穫する。野菜が苦手でも自分で育てた野菜は食べるという



燕市立分水小学校は、今年度から子どもが自分で弁当を作り学校に持参する「弁当の日」を全学年で始めた。初回のめあては、低学年が「弁当箱に詰める」、中・高学年がそれに追加して「米をといで炊く」としたが、高学年だけでなく、中学年でも自分で作ってきた子どもが大勢いた。登校時、教師に「全部作ってきたよ!」と弁当袋を誇らしげに掲げる子どもたち。昼食時には弁当の見せ合いが繰り広げられたクラスもあった。

昨年度は、朝食のメニューや給食の残食率を改めようと、食べることの意味、食事の大切さ、食品添加物をそれぞれテーマにした講演会を実施した。中庭では野菜の栽培も行い、給食には地元の野菜で作られたメニューが並ぶ。今では、「食料品を買う時には裏の表示を見るよ」「何を食べるか考えるようになった」と話す子どももいるという。次の弁当の日は11月。どんな弁当が見られるか楽しみだ。

過去1年間の
特集テーマ

Back Number

2013 Vol.1 授業で高める自己肯定感

Vol.4 学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

2012 Vol.3 授業が活きるICT

Vol.2 子どもが伸びる学習評価

すべての記事を、ウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://berd.benesse.jp> または で

次号 Vol.3 は 11月中旬発行(予定)です